

長野県松本市

殿村遺跡

— 第1次発掘調査概報 —



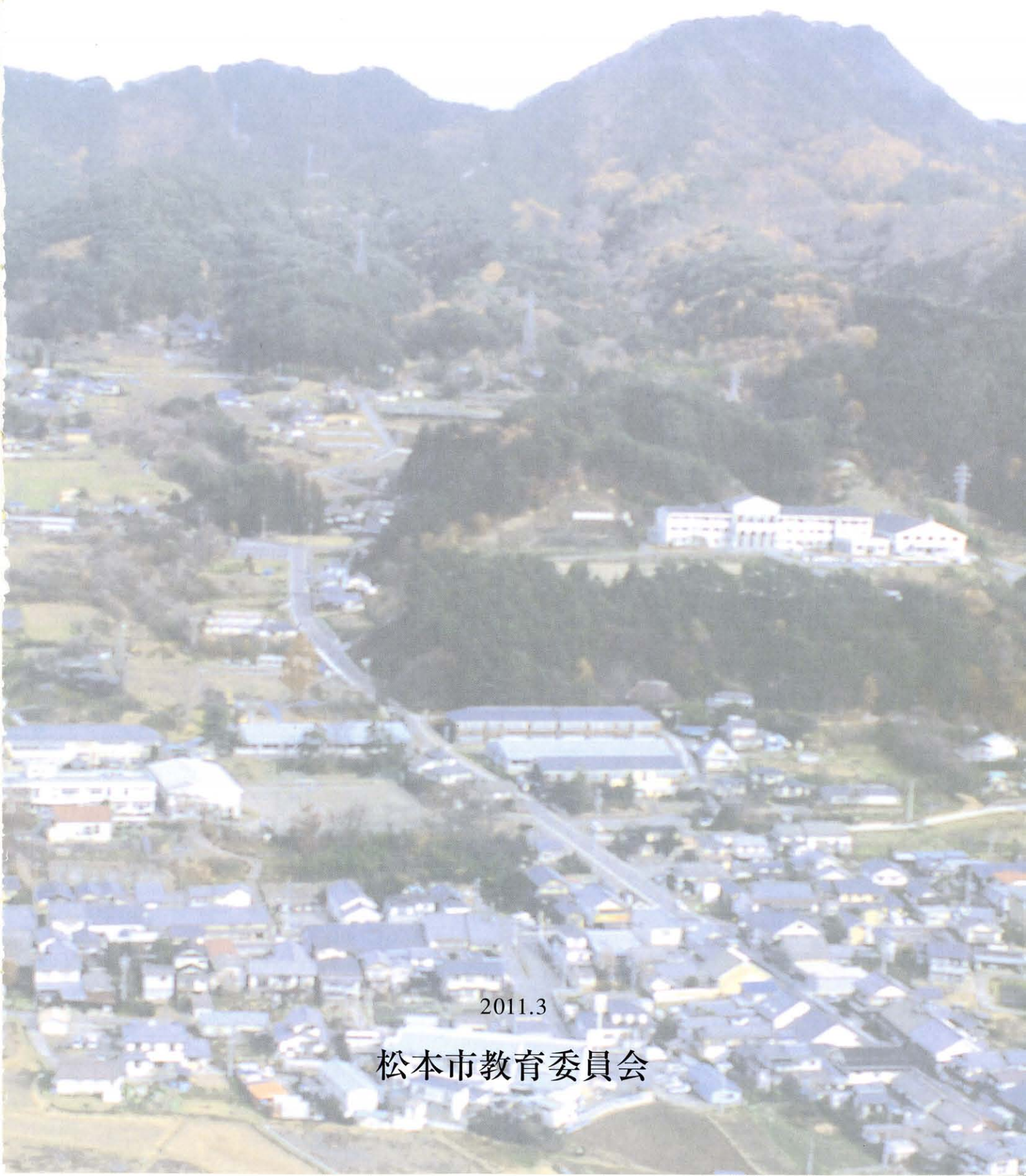
2011.3

松本市教育委員会

長野県松本市

殿村遺跡

— 第1次発掘調査概報 —



2011.3

松本市教育委員会



殿村遺跡 石積A (部分)



殿村遺跡 石積A・B (3・4面) と2面の遺構群

例 言

- 1 本書は平成20年9月7日～平成22年1月29日に実施された殿村遺跡（松本市会田536番地外）の発掘調査概要報告書である。
- 2 本調査は松本市教育委員会による四賀地区統合小学校建設工事に伴い、遺構・遺物の記録保存を目的に実施したものである。また、平成21年7月に学校建設予定地の変更と遺跡の保存が決定したため、以降は保存を前提とした調査に切り替えた。
- 3 本調査は平成20年度に発掘調査を、平成21年度には発掘調査と遺跡の保護措置（埋め戻し）を実施した。また、平成22年度は国庫補助事業（市内遺跡緊急発掘調査）として本書の作成を行った。
- 4 本書の執筆分担は以下のとおりである。
Ⅰ：事務局、Ⅱ－2－（2）－ウ・（3）、Ⅲ－3－（1）・（3）、Ⅳ－1：宮島義和、Ⅲ－3－（2）：原田健司、
その他：竹原 学
- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：百瀬二三子、中澤温子
焼物接合：中澤温子
金属製品保存処理：洞澤文江
木製品保存処理：久根下三枝子
遺物実測・トレース：（焼物）竹内直美、竹平悦子、八板千佳 （石製品）原田健司
（金属製品）洞澤文江 （木製品）久根下三枝子
遺構図整理・トレース：荒井留美子 電子トレース：石井佑樹、竹原 学
写真撮影：（遺構）山本紀之、宮嶋洋一、横井 奏 （遺物）宮嶋洋一
（周辺文化財）三村竜一、宮島義和、竹原 学
（航空写真）株式会社地図測量、株式会社みすず総合コンサルタント
地形測量：株式会社みすず総合コンサルタント
自然遺物・岩石同定・吉井 理：（貝・骨類）、パリノ・サーヴェイ株式会社（その他）
編集：竹原 学
- 6 本書は出土遺構・遺物の概要を記述することを方針とし、個々の遺構やすべての出土遺物の提示は本報告に譲る。また、本書中で示した図面や見解はあくまで現段階でのものであり、本報告時に変更される可能性がある。
- 7 本書の中で使用した遺構名等の略称は以下のとおりである。
竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P、掘立柱建物址・礎石建物址→建、柱穴列→柱列、焼土面（炉址）→焼
- 8 焼物実測図（第20～22図）の断面塗り分けは以下のとおり種別を表している。
白色：土師質土器、黒色：須恵質土器・陶磁器、灰色：瓦質土器
また、上図において、土師質土器皿のタール付着部分を砂目トーンで表した。
- 9 埴塼・鞆羽口実測図（第27図）の溶滓付着範囲は網目トーン、また被熱赤化範囲は点線で表した。
- 10 本書の図中で使用した方位は真北を指している。
- 11 調査から報告書作成に至るまでの間、以下の方々・団体から指導・助言・協力を得た（敬称略）。なお、調査指導委員等関係者については第Ⅰ章に記載した。
会田 進、会田能久、神澤昌二郎、井原今朝男、市川恵一、市川隆之、遠藤公洋、河西克造、河合君近、桐原 健、五味盛重、佐々木邦博、関沢 聡、竹内靖長、橋口定志、原 明芳、平澤 毅、平林 彰、降矢哲男、松本建速、馬淵和雄、宮本長二郎、望月道彦、横内文人、渡邊定夫、会田地区各町会、会田宿町並み委員会
- 12 本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189）に保管している。

目次

巻頭図版

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経緯	7
1 調査の原因と経過	7
2 文書記録	8
3 調査体制	8
第Ⅱ章 殿村遺跡と会田周辺環境	9
1 自然的環境	9
(1) 会田盆地の地形と地質	9
(2) 遺跡付近の地形と地質	9
2 歴史的環境	10
(1) 原始・古代	10
(2) 中世・戦国時代	10
(3) 近世以降	12
第Ⅲ章 調査結果	21
1 調査の目的と方法	21
2 遺構	25
(1) 平場築造に関わる遺構	25
(2) 区画に関わる遺構	28
(3) 建物址	28
(4) 炉址	28
(5) 土杭・ピット・その他	28
3 遺物	38
(1) 焼物	38
(2) 石製品	43
(3) 木製品	45
(4) 金属製品・鍛冶関係資料・ガラス製品	47
(5) 自然遺物	47
第Ⅳ章 調査のまとめ	49
1 遺物の様相について	49
2 造成面と遺構の変遷について	50
3 現時点における遺跡の評価と今後の調査課題	56

写真図版

報告書抄録

表紙写真説明・奥付



第1図 殿村遺跡の位置



第 I 章 調査の経緯

1 調査の原因と経過

殿村遺跡は松本市区会田字殿村に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。旧東筑摩郡四賀村の時代を含め、これまでに当該遺跡内における発掘調査は実施されていない。

平成 20 年、松本市教育委員会は松本市会田 536 番地ほか、面積 25,775㎡を予定地として四賀地区統合小学校の建設を決定し、それを受けて文化財課では対象地内の遺構・遺物の有無について試掘調査を実施した。その結果、校舎等主要建物の建設予定地である松本市会田運動場（会田中学校旧グラウンド）の南半部を中心に古代～中世の遺構・遺物の存在が確認され、建設に際し破壊されることが確実となった。そこで文化財課では、学校建設担当である学校教育課と埋蔵文化財の保護策について協議し、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は校舎建設範囲約 1,600㎡を対象に、11 月末完了を目標として 9 月 7 日に開始した。しかし、当初予想に反して遺跡が複数層からなる中世の大規模な造成跡であることが判明し、開始早々に先行トレンチの壁面から石積が出現した。調査が当初予定を超え長期に及ぶことが予想されたため、学校教育課と再協議のうえ調査期限を翌平成 21 年 3 月末まで延長することとしたが、難解な造成面の構造と厳しい冬季の環境により大幅に調査が遅れた。また複雑な遺跡の理解のため、遺構面の広がりや重層関係を再確認する必要にも迫られた。そこで、県教育委員会の指導の下でさらなる協議を実施し、6 月末までの調査期間延長を決定した。そのうえで、平成 20 年度内は調査区周辺の確認調査により遺跡の構造的な理解を優先して進めることとした。平成 21 年度は調査区における遺構調査を再開したが、確認調査の結果遺構分布範囲が拡大し、さらに校舎設計の修正により調査必要面積が大幅に拡大したため、期間内の調査完了は非常に厳しいものとなった。そこで、教育委員会では本体工事に先立つ既存構築物の除却工事の工程を見直し、10 月末を最終期限として調査期間を延長するに至った。

ここまでの間、現地説明会（2 回開催）や調査速報展（「発掘された松本」展、四賀支所ロビーでのパネル展等）、四賀地区内小中学校児童生徒の見学、マスコミ報道等により地元を中心とする市民や研究者から遺跡の重要性と保存についての関心が次第に高まり、市議会でもこの問題が取り上げられた。また、市民・研究者有志や長野県考古学会、市議会会派等から保存に対する要望書が相次いで寄せられるようになった。教育委員会では設計変更による遺跡主要部の破壊回避策を繰り返し検討したが根本的な解決方法は見出せず、また地元との合意の上で決定した開校時期に建設を間に合わせるためには、これ以上の発掘調査の延長は不可能な状態であった。こうした状況の中、平成 21 年 7 月 27 日には地元である四賀地区町会連合会より「殿村遺跡保存及び四賀小学校早期建設に関する要望書」が提出された。ここに至って、教育委員会は遺跡の全面的な保存と学校建設予定地の変更を決定し、市長が町会連合会に対しこれを回答、続いて市議会教育民生委員協議会に報告して了承を得た。

保存が決定したことにより、以後の調査は遺跡の性格把握のため必要最小限の内容にとどめ、10 月には文化庁近江俊秀調査官の現地指導を受けた。そのうえで遺跡の正確な記録や将来的な活用を視野に、土層剥ぎ取り標本の作製や石積の三次元測量等を実施した。さらに遺構を保護しながら確実に埋め戻すため、その方法について奈良文化財研究所の助言を受け、専門コンサルタントに検討と監修を委託した。平成 21 年 12 月から人力による遺構・トレンチ埋め戻しと機械力による遺構面保護砂被覆・表土埋め戻し整地からなる工事を開始し、翌 22 年 1 月 29 日に完了した。

遺跡の保存決定後、文化財課では文化庁、県教委の指導を受けながら今後の方針について検討を進め、調査に関しては専門家による調査指導委員会を組織し、その指導の下で実施していくこととなった。

平成 22 年度は年度当初に開催した第 1 回調査指導委員会において意見を求めたうえで、国宝重要文化財等保存整備費補助金を取り入れ、遺跡の確認を目的とする第 2 次調査の実施と、第 1 次調査の出土遺物の整理及び概要報告書作成を進めた。

2 文書記録

平成 22 年度の国庫補助金交付に係る文書記録は以下のとおりである。

平成 21 年 11 月 19 日 平成 22 年度補助事業計画書提出

平成 22 年 2 月 17 日 平成 22 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

4 月 1 日 平成 22 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知

12 月 13 日 殿村遺跡埋蔵文化財発見届及び保管証、発掘調査終了報告書提出

3 調査体制

(1) 平成 20 年度

調査団長 伊藤 光 (松本市教育長)
調査担当者 三村竜一 (主査)、宮島義和 (囑託)、福沢佳典 (同)、横井 奏 (同)、石井佑樹 (同)
調査員 三村 肇、宮嶋洋一、森 義直
発掘協力者 井口方宏、石川一男、今井太成、入山正男、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、猿楽あい子、塩原甲助、清水陽子、下条ちか子、曾根原 裕、高山知行、茅野信彦、中嶋 健、中村恵子、西村一敏、古屋美江、待井敏夫、待井正和、道浦久美子、宮澤昭敬、宮澤文雄、宮島智広、百瀬二三子、矢萩睦美、矢満田伸子、渡辺順子
事務局 松本市教育委員会文化財課
小穴定利 (課長)、大竹永明 (埋蔵文化財担当係長)、直井雅尚 (主査)、桜井 了 (主事)、柳沢希歩 (囑託)

(2) 平成 21 年度

調査団長 伊藤 光 (松本市教育長)
調査担当者 三村竜一 (主査)、竹原 学 (同)、福沢佳典 (事務員)、山本紀之 (囑託)、宮島義和 (同)、石井佑樹 (同)、石川真理子 (同)
調査員 宮嶋洋一
発掘協力者 井口方宏、市川重一、大滝清次、猿楽あい子、加藤朝夫、清水陽子、下条ちか子、杉浦隆俊、坪田勝夫、中村恵子、長岩茂雄、成澤 輝、西村一敏、深澤聡志、古屋美江、堀内 隆、待井敏夫、待井正和、道浦久美子、宮澤文雄、召田和男、山崎幸房、矢満田伸子
整理協力者 荒井留美子、石川一男、柏原佳子、久根下三枝子、白鳥文彦、洞沢文江、前沢里江、村山牧枝、百瀬二三子、八板千佳、山口明子
事務局 松本市教育委員会文化財課
小穴定利 (課長)、大竹永明 (埋蔵文化財担当係長)、直井雅尚 (主査)、小山高志 (主任)、柳沢希歩 (囑託)

(3) 平成 22 年度

調査団長 伊藤 光 (松本市教育長)
調査担当 竹原 学 (主査)、宮島義和 (囑託)
報告書担当 竹原 学 (主査)、宮島義和 (囑託)、原田健司 (同)
調査員 熊谷康治、宮嶋洋一
発掘協力者 大滝清次、長岩千晴、成沢 輝、召田和男、召田尚武、矢満田伸子
整理協力者 荒井留美子、柏原佳子、久根下三枝子、佐々木正子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、前沢里江、三澤栄子、村山牧枝、八板千佳
事務局 松本市教育委員会文化財課
塩原明彦 (課長)、大竹永明 (課長補佐・埋蔵文化財担当係長)、直井雅尚 (主査)、小山高志 (主査)、柳沢希歩 (囑託)

殿村遺跡調査指導委員会 委員長 笹本正治 (信州大学副学長)
委員 小野正敏 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事)
辻 誠一郎 (東京大学大学院教授)
中井 均 (長浜城歴史博物館長)
中澤克昭 (長野工業高等専門学校准教授)
水澤幸一 (新潟県胎内市教育委員会生涯学習課主任)
指導・助言 寺内隆夫 (長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事)

第Ⅱ章 殿村遺跡と会田周辺の環境

1 自然的環境（第1・2・9図、写真図版1～3）

(1) 会田盆地の地形と地質

松本市の北東部にある会田盆地は、嶺間地方とも呼ばれるように周囲を標高600～1,600m前後の低い山々に囲まれている。この山々を介して北は筑北、東は小県と接している。

会田盆地を開析した主要河川は大洞山や御鷹山、入山等から水を集めて西流する会田川と、保福寺峠付近からの水を集めて北流する保福寺川である。両河川が合流する会田付近は最も氾濫原が発達する地域である。これらの河川の両側は盆地を囲む山々の崖錐性斜面であり、その末端は浸食により断崖をなして氾濫原に接している。

会田盆地をはじめとする松本市北部の一帯は糸魚川 - 静岡構造線東側のフォッサマグナ地域にあたり、広く第三紀層が分布することで知られている。この第三紀層は中新世（約2,300万年前～500万年前）に帰属する。そのうち、会田盆地で分布が見られるのは下部から内村層、別所層、青木層、小川層と呼ばれる軟質の砂岩や砂質泥岩、黒色頁岩等からなる厚い堆積層で、鯨や貝類、魚類を中心とした動物化石を豊富に含む。ここから出土した県指定天然記念物のシナノトドやシガマッコウクジラの化石はよく知られるところである。今回の調査で検出された中世の造成土には、これらに由来する砂岩や泥岩の風化岩屑が多量に含まれていた。

盆地周囲には第三紀層の風化による崖錐性堆積が発達している。特に質の良い粘質土は古代において須恵器の原料として利用され、反町から斎田原一帯を中心に分布する窯跡群は松本平に供給される須恵器生産の一翼を担った。また、会田地区は近年まで瓦の産地としても知られ、周辺には粘土採掘坑も残る。

(2) 遺跡付近の地形と地質

殿村遺跡は会田盆地の北部を画する山々の中でひと際目を引くコニーデ型の独立峰、虚空蔵山（標高1,139m）の南麓にある。虚空蔵山は浸食により形成された山で、均整のとれた美しい山容から古来人々にとって象徴的な存在であった。その南麓には会田川に注ぐいくつかの支流があるが、遺跡はその最も西にある岩井堂沢の左岸にある。標高630～660m、南は会田川の断崖に面し、眺望のよい絶好の高台である。

岩井堂沢一帯は基盤に青木層が広がり、北部の峰々にはひん岩や安山岩の貫入が見られる。青木層は砂岩や砂質泥岩からなり、岩井堂では石炭も産出する。大正年間までその採掘が行われ、索道を介して西条駅に運ばれていた。岩井堂の観音山には今でも採掘坑が残っている。虚空蔵山は岩屋神社付近から山頂までが安山岩で構成され、急峻な山肌を取り巻くように柱状節理を伴った露頭が見られる。岩井堂沢の河床礫や崖錐堆積物にはこれらの転石が多量に含まれるが、青木層由来の砂岩・泥岩は軟質のため礫の体裁をなさない。従って河床礫の観察からは正確な岩相は見えない。

遺跡の斜面の地下構造は学校建設に伴う地質調査で状況が確認されている。発掘調査による所見も加えて概観すると、対象地南部（調査区南壁付近）では現地表下1.2mまでグラウンド整地土が覆い、以下3.8mまで中世の整地土（石積前空間堆積土・2～1面整地土）が続く。それ以下は岩井堂沢の押し出し物が厚く堆積し、現地表下7～8mで基盤の青木層に到達する。これらの地層はすべて北から南へ、また東から西へと下降し、調査対象地北東部では表土直下で青木層が顔を出す。これは昭和28年のグラウンド造成に際し、北側斜面を開削したためである。なお、岩井堂沢の押し出し堆積物には相当数の安山岩礫が含まれており、岩井堂沢や会田川の河床とともに、石積や石列等の築造で必要となる石材の調達先の一つであったと考えられる。

今回発掘に際し、岩井堂沢の押し出し層上部は透水層となっていることが確かめられた。特に調査区東部において顕著で、次章でも触れるがかつて自然流路が存したと考えている。そのためか地下水は雨季に水量が増し、対象地を南に下った延長上にあるゲートボール場外便所裏手の法面に湧水が観察される。

2 歴史的環境（第1表、第2～7図、写真図版12）

(1) 原始・古代

ア 遺跡の分布

四賀地区における原始・古代の状況はまだ未解明の部分が多い。この地域における本格的な開発の始まりは古代以降のことと考えられている。それ以前の状況は会田・保福寺両河川やその支流に臨む段丘上に縄紋遺跡の分布が知られる。会田付近では保福寺川左岸の齋田原で中期後葉の遺物が採集されているほか、昭和33年に調査された五常の井刈遺跡からは中期末～後期の配石遺構が検出され、土偶等の祭祀具が出土している。弥生～古墳時代は錦部の赤怒田での弥生土器出土が知られる程度である。

イ 須恵器生産と東山道

古代、特に8～9世紀を中心とした時代において、松本市北部の芥子坊主山から会田盆地西部にかけての一带は松本平最大の窯業生産地となった。会田盆地では反町から齋田原に至る丘陵上に窯跡群の中心があり、板場窯跡やムジナカワ窯跡等で発掘調査も行われている。生産の中心は8世紀末～9世紀初頭と考えられるが、開拓に際し11基以上の窯跡が見つかった齋田原窯跡では、遺物の中に7世紀代まで遡るものがあり、注意される。会田川右岸でも西宮の八王子窯跡や会田新町の知見寺沢の河谷に3基の存在が報告されるほか、殿村遺跡においても、会田小学校校庭拡張に際し2基の窯跡が見つかったという（第9図、横内文人氏教示）。

古代の会田盆地ではもう1つ重要な点がある。それは令制東山道の通過で、岡田から稲倉峠を越えて錦部に至り、東進して保福寺峠を越え小県に至るルートが想定されている。錦部には錦織駅が置かれ近在に定額寺である錦織寺があったとされるが、関係する遺跡はまだ見つかっていない。錦織寺の所在地は真言宗の古刹洞光寺に求める見方もある。東山道は、錦織から分岐して越後に抜ける支道があった。これは反町から板場を経て直進し会田（現在の本町）を抜け、古峠に至る推定ルートであり、文禄3年絵図（第5図）にその名残をみることが出来る。後の善光寺街道はほぼこれを踏襲するが、会田宿を鍵の手に構える関係上、板場から立町まで東寄りに新道を通してしている。

このように、古代の会田盆地は須恵器生産や交通の要衝として非常に重要な位置にあった。

(2) 中世・戦国時代

ア 城館遺跡の分布

会田盆地を囲む山々には戦国期の山城がいくつか知られる。その中でも代表的なものは虚空蔵山城跡である。会田氏の詰めの城と言われ、天文22年（1553）武田軍の放火を受けたと伝わる。実質的な主郭は中腹にある中の陣城で、主郭背後の土塁と堀切、平石布積みの石垣等、松本平の典型的な小笠原氏系の山城の特徴を有している。他に馬の背状の狭い山頂部の峯ノ城や中腹の秋吉城、南西にうつつ城等の郭がある。このほか、秋吉城の西、中の陣城との間にある水の手付近の斜面には、石垣を伴う幅の狭い段郭が10数段見られ、水路状の石組や斜行する石垣等、一概に城郭施設と判断していいのかわからない遺構が存在する（写真図版12）。

会田盆地の城館遺跡として他に、会田川の対岸に一期城がある。小規模な城郭だが、天正10年（1582）、小笠原貞慶の攻撃で会田勢が最後を遂げた地とされる。会田氏滅亡に伴い、武具・甲冑等の遺品は廣田寺の境内、岩井堂沢とうつつ沢の合流点近くに埋葬され、会田塚として今日に伝わる。

その他、武田・上杉攻防の舞台となった荊屋原城（荒神尾城跡に比定される）をはじめ20箇所近くの城館遺跡が知られる。

イ 信仰関係の遺跡と文化財

武田氏や上杉氏の信濃攻略といった政治史の陰に隠れがちで記録も残っていないが、中世の会田は宗教空間としての側面も有していたようである。とりわけ虚空蔵山とその南麓は重要な地域である。

虚空蔵山は城郭となる以前より、その山容に加え山頂を取り巻く峻険な岩場や湧水の存在から信仰の対象だったと考えられる。それは磐座や水分など古代以前まで遡るものだったのだろう。山頂近くには岩屋神社があり、磐座を思わせる岩壁に懸造りの社殿がある。またオゲ水、水の手、うつつ清水等山腹や山麓の各所

には湧水も見られる。

行場を思わせる岩肌が連なり、信濃二十番札所観音霊場として善光寺街道を行き交う参詣者で賑わった岩井堂の観音堂も修験道や密教との関連を思わせ、弘法大師伝説を伴っている。うつつ城跡の南麓には弘仁10年(819)に真言宗の寺院として開山したと伝わる無量寺がある。やはり弘法大師伝説のある古い寺である。調査地に東接する長安寺は岩屋神社の別当で、文永5年(1265)蘭溪道隆(大覚禪師)の招聘開山とされる。虚空蔵菩薩を本尊とし、より古く遡る寺と推定される。会田氏滅亡とともに衰退したが現在まで細々命脈を保ち、祈祷の寺として近年まで春に齋串状の田の神を売っていた(写真図版12)。遺跡の南、現会田小学校体育館付近にあった補陀寺も無量寺、長安寺とともに天正9年(1581)の「信濃道者御祓いくばり日記」(第6図)にその名が見える古い真言宗の寺院で、室町時代初期の製作とみられる阿弥陀如来像が伝わる。岩井堂の観音堂は補陀寺の奥院である。廣田寺は会田氏の菩提を弔うため現在地に伽藍を移した寺院で、前身は知見寺である。永正年間(1504～1520)、小笠原氏の菩提寺として知られる里山辺の広沢寺4世雪江玄固の開山とされるが、ここもそれ以前に遡る古い寺院の可能性もある。知見寺の詳細な位置はわかっていない。

続いて神社では会田御厨に関係が深い御厨神明宮がある。この地域では数少ない神明造りの本殿が鎮座し、境内には天台宗の神宮寺が置かれていた。

以上のように、会田地区にある起源の古い寺院は多くが戦国期中興開山に際して改宗されており、残念ながらそれ以前の記録がほとんど残されていないのが実情である。

次に中世の石造物であるが、会田本町の西に緑色片岩製の板碑を出土したにごみ堂跡がある。文禄3年絵図では「人埋堂」と記され堂が存していたらしい。現在尾根先端に半島状の地形があり、墓地内に宝篋印塔や五輪塔の残欠数基が残る。他に廣田寺や無量寺墓地にも宝篋印塔等があり、前者からは板碑も出土している。殿村遺跡からはやや離れるが、板場の沢屋には宝塔もある。松本平は中世の石造物が決して多い地域ではないが、その中にある会田盆地は比較的密度の濃い地域といえる。

このほか、中世の信仰に関わる遺跡として、会田川左岸に齋田原経塚がある。詳細は不明であるが経石(一字一石経)が出土したとの記録もある。また、最近注目される遺跡として長居原遺跡(仮称)がある。中の陣城の麓、永井原と呼ばれる知見寺沢沿いの緩い尾根斜面に石積や石塁、道路を伴った造成面が広範に分布している(第2・3図、写真図版12)。昭和50年代までは荒地や畑地になっていた。表面的な観察からは石積や石塁に古い様相が認められ、殿村遺跡や虚空蔵山城跡の石積・石垣と比較検討が必要である。文禄3年絵図では「長居原」、「軍さの稽古場」などの記述が見える。中世の信仰関係遺跡群の可能性もあり、平成22年からは東海大学考古学研究室が測量調査を開始している。

このような状況から、現在では記録・伝承もほとんどなく忘れられているが、虚空蔵山を中心とした一帯は古代・中世を通じて交通の要衝、政治の舞台だけでなく、信仰の空間でもあった可能性が濃厚である。

ウ 会田御厨と会田氏

会田は中世において伊勢神宮内宮の領地すなわち御厨であった。それは伊勢神宮の内宮・外宮の所領を国別に書きあげた『神鳳鈔』の記載からわかり、その成立は『神鳳鈔』の記載が始まった建久4年(1193)以降ということになる。御厨本来の役割は神に供える神饌(水・酒・穀類・魚・野菜・果実など)を上納することである。それでは会田御厨は何を上納したのだろうか。『諏訪御符禮之古書』文明11年(1479)の御射山祭頭役状で会田について、「小岩井郷一郷にて頭勤め候、余郷四ヶ条は勤め仕まつらず候」とみえ、会田御厨は五ヶ条(五つの郷)により構成されていたことがわかる。降って永禄9年(1565)諏訪上社大宮御門造宮に関わって「會田五ヶ條」がみえ、その内訳は苅屋原・明科・塔原・會田・多澤(田澤)となっている。小岩井郷と記されている点問題を残すが、會田郷の一部とみられ、広い意味での会田(会田御厨)は上記の五ヶ條で成り立っていたのではないだろうか。明科・塔原は犀川流域であり、近世において塔原村は川鮭役を勤めている。ここで会田御厨の上納品に鮭が含まれていた可能性が出てくる。ただ『神鳳鈔』では鮭やその腹兒は麻績御厨に課されており、会田御厨の上納品目について記述されていない。この点は会田御厨と麻績御厨の関係を上納品と関連付けて今後考察する必要がある。

会田御厨を在地で支配していた人物を知ることができる最初の史料は嘉暦4年(1329年)の鎌倉幕府下

知状案で、諏訪社上社の祭りの頭役として「會田御厨海野信濃權守入道以下」の記載がみられる。海野氏は滋野氏の系統をひくとされる小県郡に本拠をもつ一族である。14世紀前半には会田の地に勢力を伸ばしていたことがわかり、それまでの間に会田は御厨となっていた。しかしこの後125年間にわたり記録が途絶え、享徳4年(1455)の『諏訪御符禮之古書』に「會田、岩下入道沙弥重何」の記載がみられ、在地領主が海野氏から岩下氏に代わっている。近世の刊本であるが応永7年(1400)大塔合戦の様子を描いた『大塔物語』には、守護小笠原長秀に対抗する一軍として「海野宮内少輔幸義、舎弟中村弥平四郎・會田岩下・・・」とみられ、この記述が正しければ遅くとも14世紀末には会田に海野系の岩下氏が入っていたことになる。以後15世紀後半には「岩下海野満幸」「海野岩下増寿丸」といった名がみられ、近世以降の史料にみられる会田氏は以上のような在地領主家の筆頭が名乗った氏であると推定される。ここで疑問となるのはこれまでみられた会田氏の記録は全て諏訪大社関係のものであり、御厨に関するものは一切出てこない点である。おそらく会田御厨の領家となる荒木田氏との間に下地中分がおこなわれており、会田氏(海野・岩下)は御厨半分を支配に納め諏訪大社への奉仕を行う基盤としていたものと推定される。

15世紀末以降再び会田に関する記録は途絶え、天文22年(1553)の武田信玄の侵攻となる。その後岩下氏は武田軍に属し、岩下一党は信玄に対し起請文を提出している。しかし信玄の没後武田氏は勢力が衰える。その後勢力を盛り返した小笠原貞慶に対抗し天正10年(1582)会田は上杉と内通し、矢久の砦に立てこもることになる。小県の海野氏の援軍を受け戦闘に入るが会田氏はこの地(一期城跡)で最後を迎えたとされる(『岩岡家記』)。

(3) 近世以降

江戸期の会田は会田町村として松本藩領となった。戸田氏が元和3年(1617)に松本に入封した後領地の支配制度を新たに進展させるために組村制度を導入した。会田を含め旧四賀村全域と旧坂北村・本城村までおよぶ会田組が組織された。水野氏が寛永19年(1642)に入封の後城下町および各街道の整備が行われ善光寺街道も完成された。善光寺街道は当時関西方面から善光寺参詣に行く人々の主要道路となり、また松本平と善光寺平の間の物資交流に多大な役割を果たした。会田宿には本陣・脇本陣ほか12の旅籠があったとされる。会田宿内あるいは村の様子についてはやや古い史料になるが、伊勢御師宇治七郎右衛門尉家久の「信濃道者御被いくばり日記」が現存しており、天正9年(1581)当時の状況を今に伝えている。今後さらにこの史料を分析・活用していく必要がある。会田宿は松本・善光寺の中間に位置し、上田方面・明科方面への分岐点でもあったことから宿所の利用度は高かったものと思われる。宿場の出口には善光寺常夜燈があり、そこを過ぎると難所である立峠に向かうわけだが、途中にはうつつの清水があり旅人の喉をうるおしたことだろう。また街道付近には近世のものと思われる廣田寺の百体観音や岩井堂の磨崖仏を始め多くの石仏が残されており、当時の人々の信仰の深さを今に伝えている。松本藩に戸田氏が享保11年(1726)に再入封して後会田組全村は幕府預領となり、その支配を受け明治に至るのである。

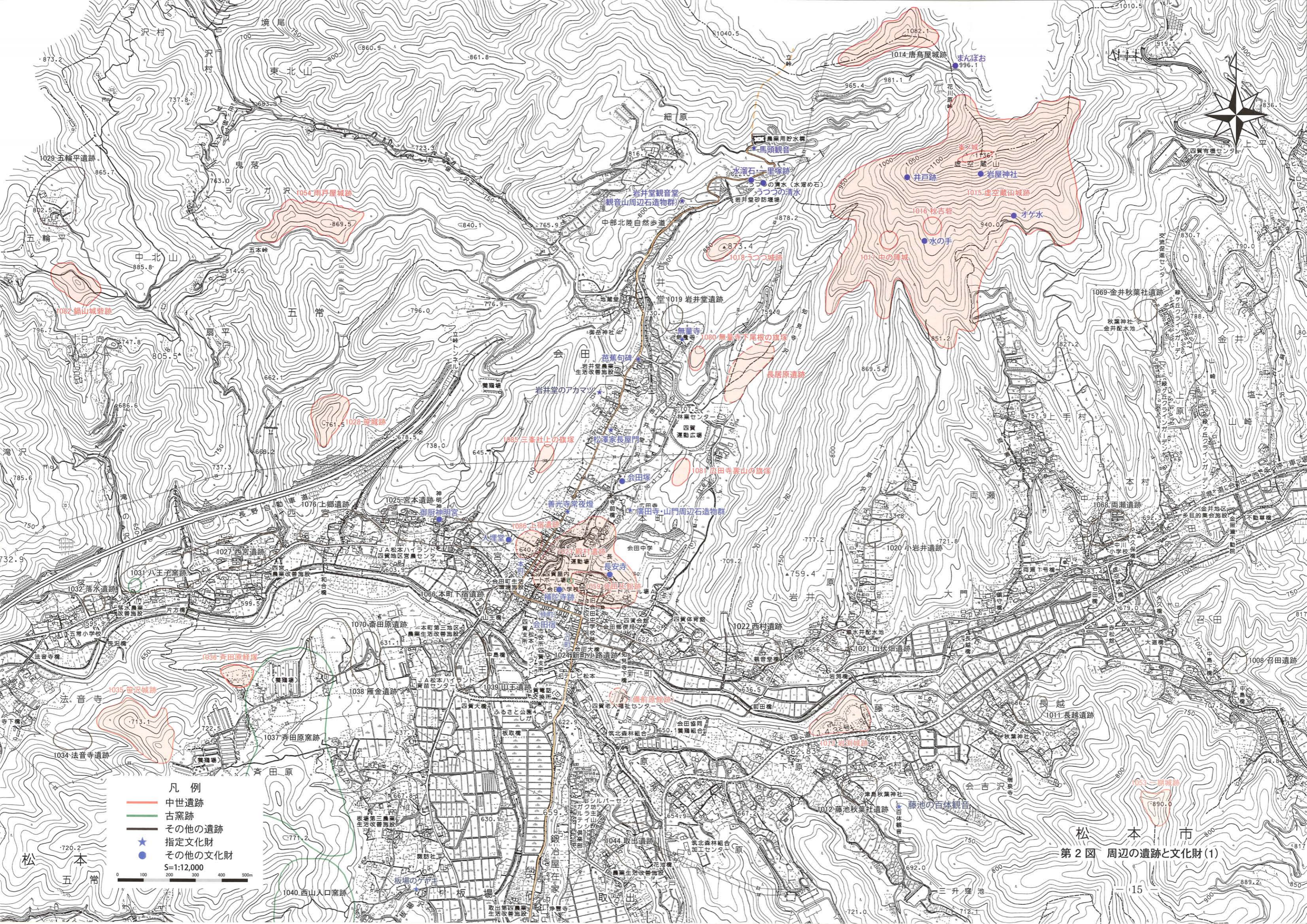
<引用文献>

- 長野県 1936 『長野縣町村誌 南信篇』
- 信濃史料刊行会 1958 『信濃史料』
- 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』 第二巻 歴史上
- 信濃史料刊行会 1975 『新編信濃史料叢書』 第8巻
- 四賀村誌刊行会 1978 『四賀村誌』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編』 全1巻(1) 遺跡地名表
- 原 嘉藤 1983 「井刈遺跡」『長野県史 考古資料編』 全1巻(3) 主要遺跡(中信)
- 長野県教育委員会 1983 『長野県の中世城館跡』
- 市川恵一 1991 『福聚山廣田寺』
- 四賀村石造文化財編集委員会 1994 『四賀村の石造文化財』 四賀村石造文化財誌刊行会
- 四賀村の社寺文化財誌編集委員会 1997 『四賀村の社寺文化財誌』 四賀村教育委員会
- 長野県考古学会 1997 『長野県考古学会誌』 81 特集松本平における古代の窯業生産 - 既出資料の再検討 -
- 四賀村教育委員会 2005 『四賀の里重要有形文化財・天然記念物』
- (有) アルプス調査所 2008 『松本市四賀地区統合小学校建設予定地地質調査業務委託報告書』
- 浜野安則 2010 「長野県中信地区の中世石造物 - 石塔から見えてくる信仰と文化 - 」『信濃』 第62巻第1号 信濃史学会

第1表 中世を中心とする四賀地区の動き

西暦	和暦		会田・四賀地区の動き	会田氏	出典	信濃の動き	全国的な動き
1193	建久	4			神鳳抄		
1268	文永	5			嶺間郷土資料 東筑摩郡村誌 刈谷原村		
1278	弘安	1			嶺間郷土資料 東筑摩郡村誌 會田村		7・24 蘭溪道隆没
1323	元亨	3	10月26日	合田左衛門尉	円覚寺文書	北条貞時十三回忌に信濃の御家人ら種々の供物を捧げる	
1326 ↳ 1329	嘉暦 年間	1 ↳ 4		會田小次郎	嶺間郷土資料（東京岩淵文書）		
1329	嘉暦 (元徳)	4 (1)	3月	諏訪上社の十番五月会分の頭役を會田御厨海野信濃權守入道以下に課す	海野信濃權守入道	守矢文書	幕府、諏訪社上社五月会御射山祭等の結番を定める
				諏訪上社宝殿御門戸屋造宮を海野・會田に課す		諏訪大社上社文書	幕府、諏訪社上社造営役を信濃諸郷に課す
1331	元弘	1			信濃史源考	笠置城攻撃、信濃國御家人多く加わる	後醍醐天皇の倒幕計画発覚（元弘の変）
1400	応永	7		會田岩下	大塔物語 信州大塔軍記	村上満信・大文字一揆など、守護小笠原長秀に反して挙兵（大塔合戦）	
1408	応永	13					
1455	享徳 (康正)	4 (1)	7月30日		岩下入道沙弥重何	諏訪御符禮之古書	
1459	長祿	3				小笠原宗清、林館に移る	
1462	寛正	3	7月29日		岩下入道三河重阿	諏訪御符禮之古書	
1464	寛正	5	8月			輯古帖 二	
1467	応仁	1	7月30日		岩下海野満幸	諏訪御符禮之古書	
			10月18日				村上頼清が小県郡海野を攻める
			12月14日			諏訪御符禮之古書	
1474	文明	6	7月30日		海野岩下増寿丸	諏訪御符禮之古書	
1479	文明	11	7月30日		海野下野守氏貞	諏訪御符禮之古書	
1485	文明	17	3月		岩下殿母死去	諏訪御符禮之古書	
			7月29日		海野下野守氏貞	諏訪御符禮之古書	
1486	文明	18				四賀村誌	
1502	文亀					嶺間郷土資料 東筑摩郡村誌 刈谷原村	
						四賀村誌 東筑摩郡村誌 刈谷原村	
1511	永正				東筑摩郡村誌 會田村		
1523	大永				嶺間郷土資料 東筑摩郡村誌 刈谷原村 信府統記		

西暦	和暦		会田・四賀地区の動き	会田氏	出典	信濃の動き	全国的な動き	
1540	天文	9 5月				武田信虎、佐久郡に侵入し諸城を陥す		
1541	天文	10 5月14日				武田信虎、諏訪頼重・村上義清とともに小県郡海野・弥津・矢沢氏を破る		
1550	天文	19 7月				武田晴信、小笠原長時を破り府中に入る、深志城の普請に着手		
1553	天文	22	3月29日～4月2日	武田晴信、苜屋原城を攻略城主長門守を生け捕り		高白齋記		
			4月3日	武田晴信、會田虚空蔵山まで放火、苜屋原城の城割り・楯立て		高白齋記	4月9日 晴信、埴科郡葛尾城を後略。村上義清、長尾景虎を頼る	
			5月7～8日	武田晴信、苜屋原の地を海下に宛がう旨伝えるが、城代今福石見守が承諾せず、海下に新村に三百貫を宛がう	海下	高白齋記	4月22日 第一回川中島の戦い	
			9月	長尾景虎の軍、青柳・苜屋原・會田の虚空蔵山城を攻める		高白齋記		
1557	弘治	3 3月10日	武田晴信、葛山城攻略での戦功から岩下藤三郎に感状を与える	岩下藤三郎	諸州古文書 甲州	8月29日 第三回川中島の戦い		
1565	永禄	8 11月1日	諏訪社祭礼再興に際し、會田五ヶ条の苜屋原・會田・明科・塔原・田澤が正物を負担する		諏訪大社文書	武田信玄、諏訪上社・下社の祭礼を再興させる		
1567	永禄	10 8月7日	岩下氏一党、塔原織部幸知等、武田信玄に対し忠誠を誓い起請文を生島足島神社に奉納、下野親子逆心の場合も甲州方に付くことを誓う	岩下駿河守幸実 同名新十郎長高 同名源介幸広 下野守親子	生島足島文書			
1570	元龜	1 4月7日	諏訪上社四月会宮頭を會田に課す			御頭役請執帳		
1575	天正	3 5月21日				長篠の合戦で、武田方信濃諸將戦死	長篠の合戦で、織田・徳川連合軍、武田勝頼を破る	
1578	天正	6 2月	諏訪上社大宮御門の造宮錢五貫九百文を會田五ヶ所が負担する			上諏訪造宮帳		
1579	天正	7 2月	諏訪上社大宮御門屋の正物二貫文を會田郷が負担する、代官岩下彦衛門尉	岩下彦衛門尉		上諏訪造宮帳		
1581	天正	9	諏訪上社、この年の頭役料を注し、會田郷が四貫七百文を負担する			御頭書		
			伊勢神宮の神宮宇治七郎右衛門尉久家が「お祓い配り日記」作成、会田分に岩下一党、矢久城代となる堀内越前の名がみられる	岩下殿 同名筑前守殿 同名備前守殿 同名源田殿 同名監物殿 同名しま殿		堀内家文書		
1582	天正	10	8月9日	小笠原貞慶が會田に赤澤式部少輔を遣わす		御書集 (笠系大成附録)	小笠原貞慶、筑摩郡日岐城を攻める	6月9日 本能寺の変で織田信長自害
			11月	會田の城の者達が越後に内通し、矢久に小屋を建て立てこもる。当主相田が若年なので家老堀内越前が采配をとるが、敗死する	相田 幼主會田小次郎廣忠が小県に逃れ自殺したという	岩岡家記 二木家記 嶺間郷土資料	小笠原貞慶による會田攻略	
			12月	青柳伊勢守頼長、伊勢神宮に會田の地二十貫文を寄進する		青柳文書		
1583	天正	11	1月16日	青柳伊勢守頼長、伊勢神宮に苜屋原・塔原・明科・田澤それぞれから合わせて四十貫文を寄進する		伊勢古文書 二上		
			2月12日～14日	赤澤式部少輔、小笠原貞慶に対し謀反を企て切腹。刈屋原には小笠原出雲守頼貞が入る。會田一党と思われる塔原(海野)三河守も殺害される。		御書集 小笠原家譜		



- 凡例
- 中世遺跡
 - 古窯跡
 - その他の遺跡
 - ★ 指定文化財
 - その他の文化財

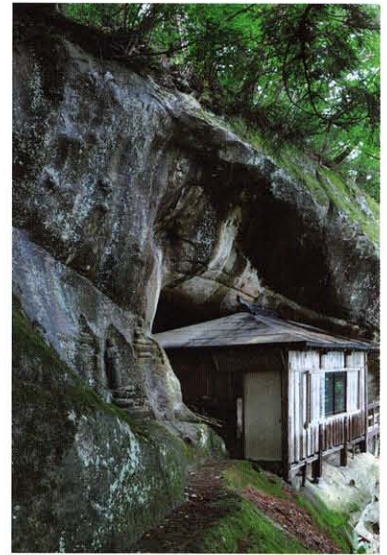
第2図 周辺の遺跡と文化財(1)



虚空蔵山城跡（中の陣城）



虚空蔵山城跡（水の手付近の石垣）



岩屋神社



長居原遺跡（仮称）の石塁状遺跡



会田塚



無量寺（登録有形文化財）



宝篋印塔（無量寺墓地）



廣田寺山門周辺石造物群（市指定文化財）



板碑（左：廣田寺墓地、右：人埋堂跡、松本市立博物館蔵）



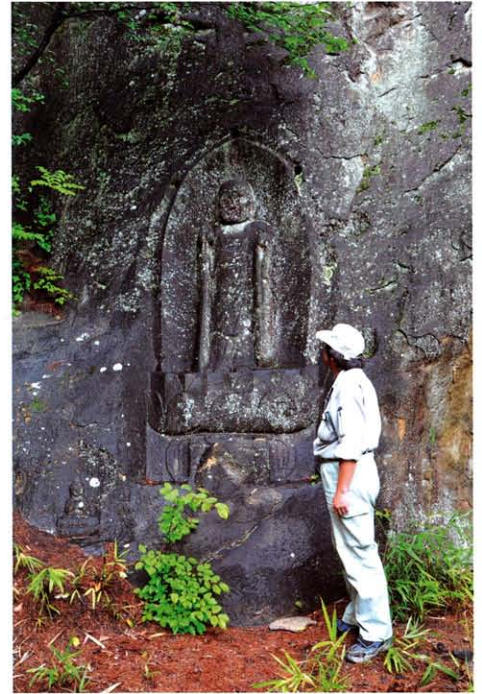
第3図 周辺の遺跡と文化財(2)



長安寺の大覚禅師像（鎌倉時代）



立峠口の馬頭観音（市指定文化財）



岩井堂の磨崖仏（市指定文化財）



松澤家長屋門（市指定文化財）



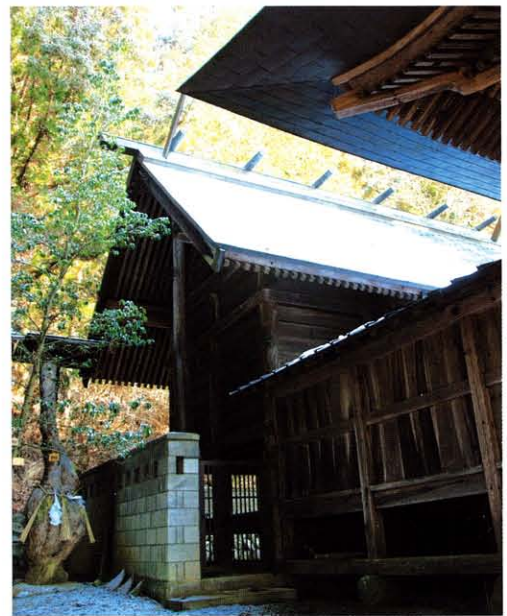
芭蕉句碑（市指定文化財）



善光寺常夜燈（市指定文化財）

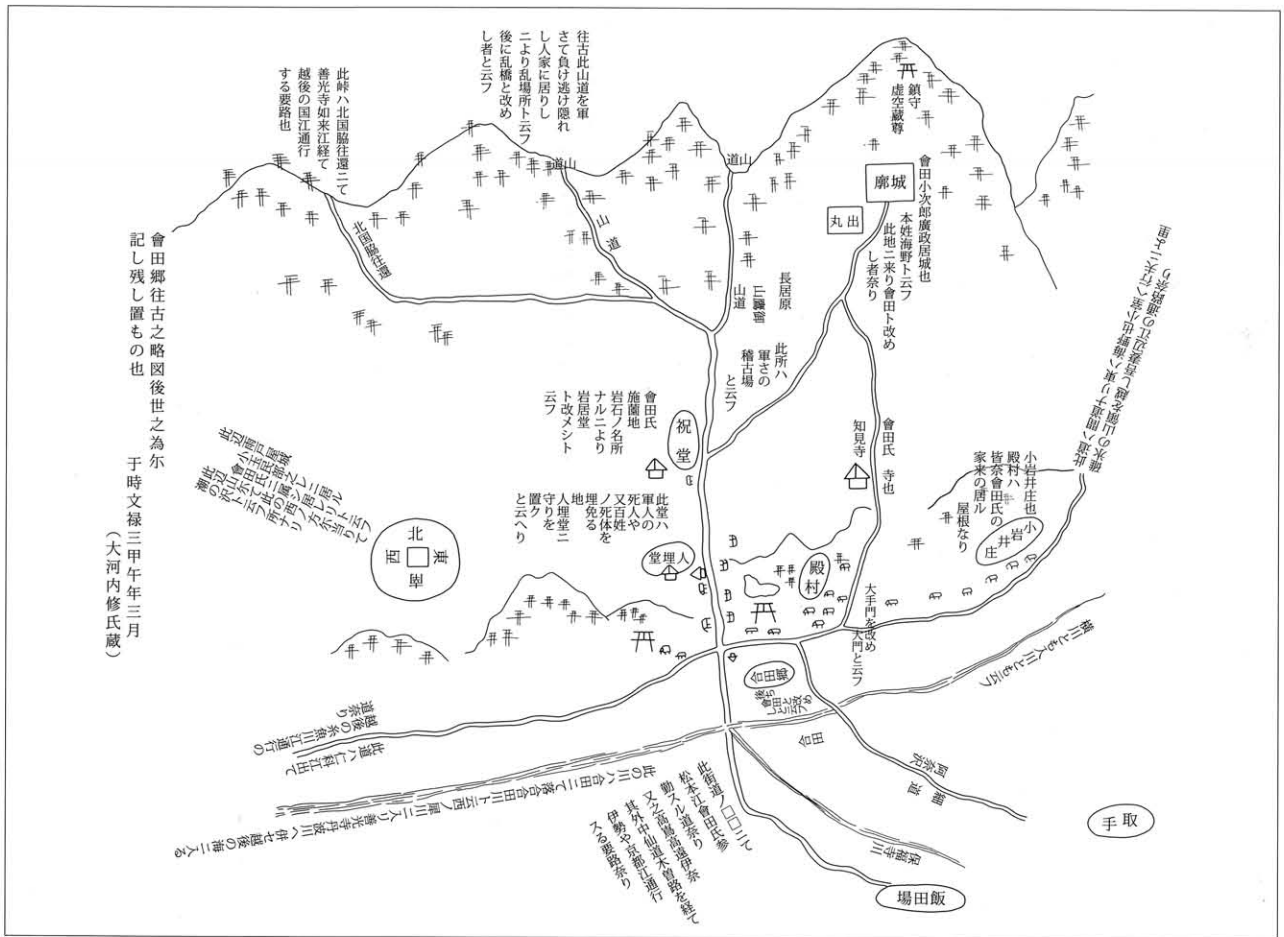


会田宿（立町）

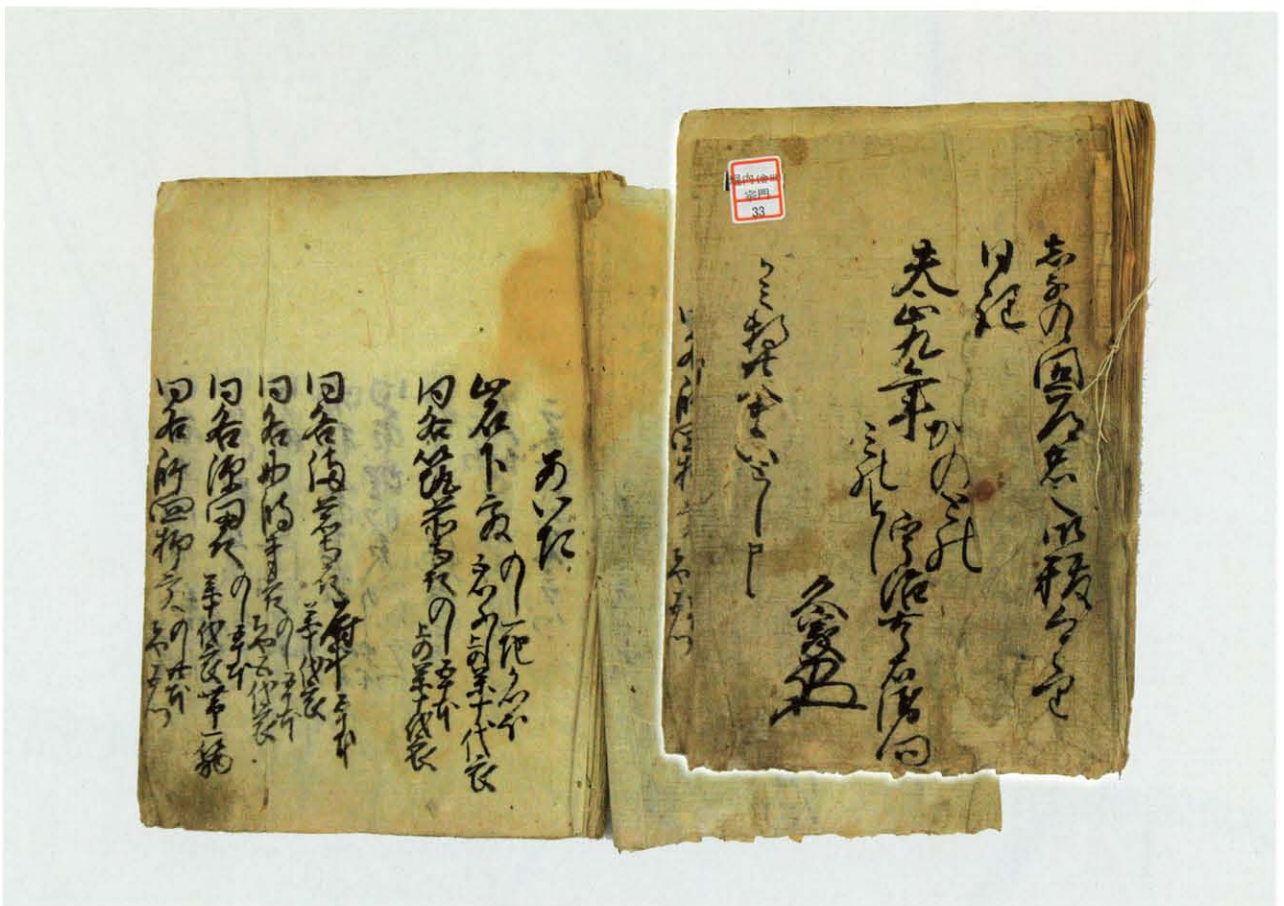


会田御厨神明宮

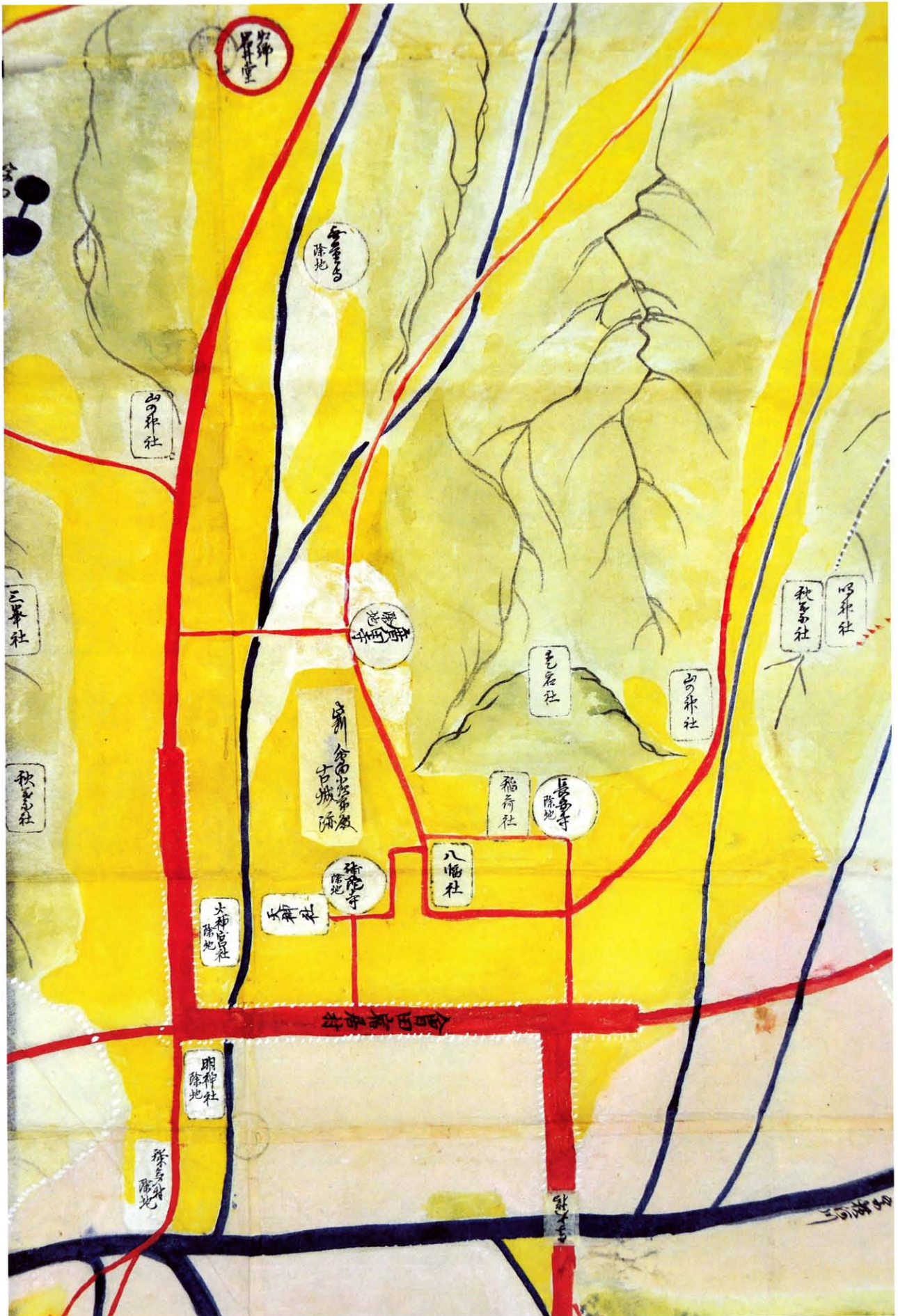
第4図 周辺の遺跡と文化財（3）



第5図 文禄3年「會田郷往古之略図」(写しをトレース)



第6図 天正9年「志奈の、国道者之御祓くば里日記」



第7図 明治2年会田町村絵図

第三章 調査結果

1 調査の目的と方法 (第8～10図)

調査目的 今回の調査は学校建設に伴う埋蔵文化財の記録保存を目的として開始した。しかし平成21年7月の全面保存決定以後は遺構保護の為の調査へと目的が転換した。これにより、3面以下の調査は控え、調査途中の2面(平成21年度に新規拡張した調査区北東～東部、北西部は1面)をもって終了した。

調査区と遺構面確認トレンチ 調査区の設定は校舎の設計に従い、当初南校舎・昇降口棟予定地をA区、北校舎をB区としたが、保存決定によりA区(南北50m・東西59m・面積1683.5㎡)のみの調査にとどまった。面的調査のほか、調査区周辺への遺構面の広がり把握するため、トレンチC～Jによる確認調査も実施した。

調査手順(第8図) 調査区における調査は基本的に次の手順で進めた。①重機による先行トレンチA・B掘削、調査・記録 → ②調査区設定、重機による表土除去 → ③1面の調査・記録 → ④1面整地土除去 → ⑤2面の調査・記録、空中写真撮影 → ⑥石積の調査・記録(石材鑑定・写真測量・三次元計測) → ⑦調査区内トレンチ調査、土層剥ぎ取り標本作成) → ⑧トレンチ埋め戻し(遺構面保護シート敷設、砂嚢による石積保護、各遺構の保護砂被覆、発生土による埋め戻し、ランマーによる締固め) → ⑨調査区埋め戻し(クレーンによる保護砂散布、埋め戻し用土中の大礫除去、バックホー・ブルドーザによる埋め戻し・整地)

調査面・遺構名・番号管理 中世の平場は複数の生活面からなるため、上層から最下層の旧地形面までを1～5面に区分し、1面から順を追って調査を進めた。しかし2面は構成が複雑で東部や西部では3・4面の遺構が混在する(帰属が明確なもの以外2面の遺構として扱った)。

石積・石列・集石を除く遺構はすべて通し番号で管理し、種別名称は整理段階まで付さなかった。

測量記録 測量の基本となるメッシュは、国家座標既知点から導いた基準点を原点に東西南北3m単位で設定した。座標は原点をNS0・EW0とし、北方向にN3・N6…、西方向にW3・W6…と表示した。原点の座標値はX39318.430・Y45489.457である(世界測地系、平成22年に基準点測量を実施し補正)。

遺構測量は簡易遣り方により、基本の平面図は縮尺20分の1で記録した。そのほかトータルステーションによる記録も一部で実施した。石積A・Bについては写真測量に加え、石積Aの西半部で三次元計測も実施した。

写真撮影 35mmモノクロ・カラーネガ撮影を実施した。またコンパクトデジタルカメラやデジタル一眼レフカメラを併用した。空中写真撮影は2面調査完了段階でラジコンヘリコプターによりブローニー判カラーポジ撮影を行ったほか、平成22年度には周辺地形を含む広範囲の垂直写真撮影によりデジタルオルソ写真を作成した。

第2表 調査成果一覧

調査期間	平成20年9月7日～平成22年1月29日		査面積	2027㎡(調査区1683.5㎡・調査区外トレンチ343.5㎡)
検出面	1面:16世紀前葉～中葉、2面:15世紀後葉～16世紀前葉、3面:15世紀中葉～後葉 4面:15世紀前葉～中葉、5面:奈良時代～15世紀初頭			
検出遺構		出土遺物		
竪穴住居址	1基 (古代)	縄紋時代	土器・石器	
石積	6基 (中世)	古代(奈良・平安)	土師器・須恵器・灰釉陶器	
石列	12基 ”	中世(12～16c)	焼物:土師質土器(皿・鉢・播鉢・内耳鍋)	
集石	4基 ”		須恵質土器(播鉢)、瓦質土器(播鉢・風炉)	
溝状遺構	56基 (古代・中世)		山茶碗(碗)、珠洲(甕)、常滑(甕)	
焼土面(炉址)	33基 (中世)		古瀬戸・大窯系陶器(天目茶碗・平碗・丸碗・豆皿・縁釉小皿	
礎石(単独)	32基 ”		・折縁深皿・直縁大皿・卸皿・合子・碗形鉢・播鉢形小鉢・	
礎石建物址	5基 ”		播鉢・瓶子他)	
掘立柱建物址	8基 ”		中国産陶磁器(天目茶碗・青磁碗・白磁碗・青磁四耳壺他)	
柱穴列	17基 ”		石製品:硯・砥石・茶臼・石臼・石鉢	
土坑・ピット	854基 (古代・中世)		木製品:漆器・下駄・曲物・狭匕・箸状木製品・串状木製品・短冊状	
土塁	1基 (中世)		板・刀形・部材・端材・削屑	
			金属製品:刀子・釘・銅銭・不明銅製品	
			鍛冶関係資料:埴塙・羽口	
			ガラス製品:円板状	
			自然遺物:貝・骨・種実等	



試掘調査



現地説明会



表土除去・Aトレンチ調査



土層剥ぎ取り



第1面の調査と測量記録



石積Aの三次元計測



石積A・Bの調査



調査指導（小野正敏氏）

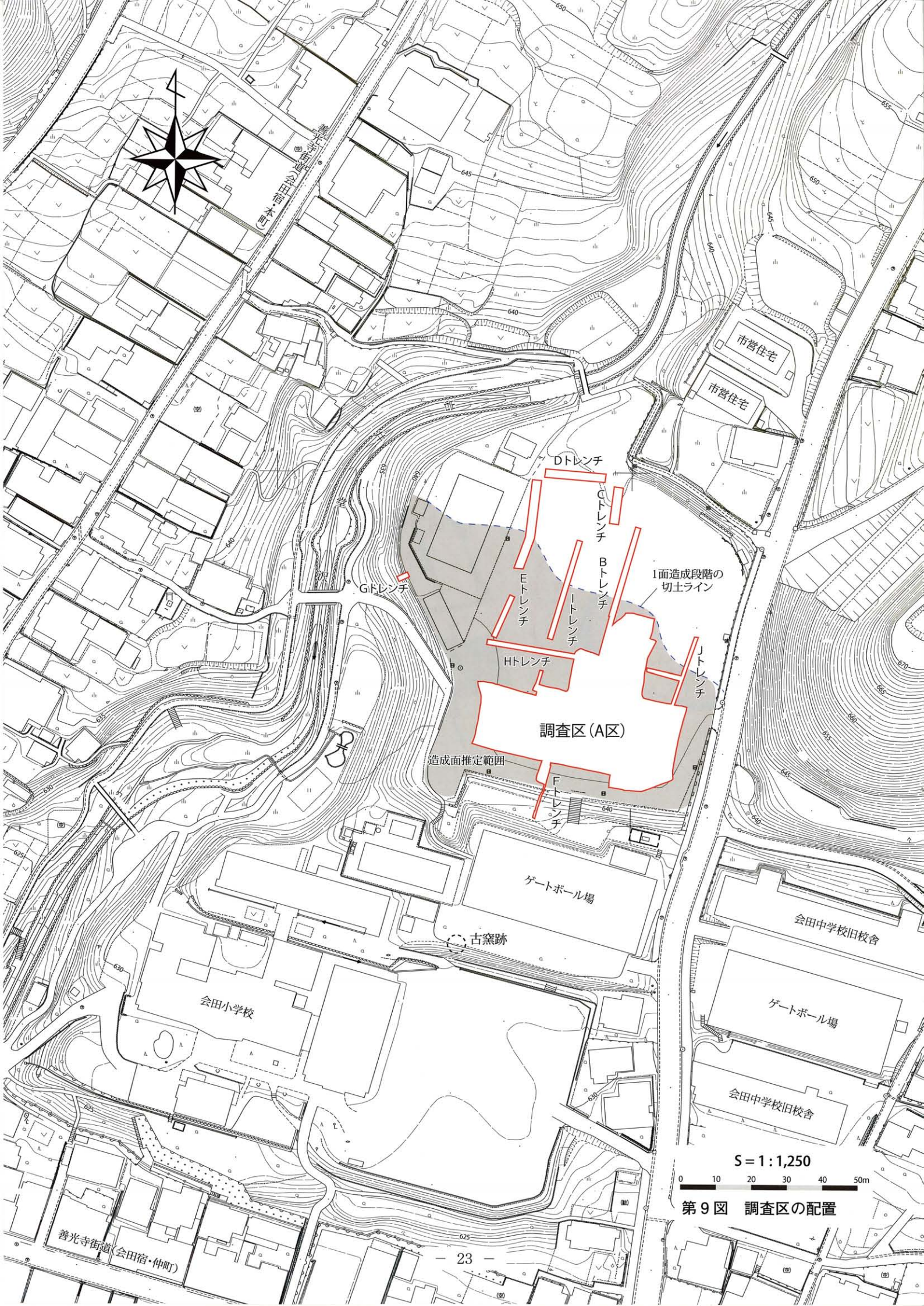


中川小学校児童見学



人力と重機による埋め戻し作業

第8図 調査の記録



Dトレンチ

Cトレンチ
Bトレンチ

Eトレンチ
Iトレンチ

Hトレンチ

1面造成段階の切土ライン

Jトレンチ

調査区(A区)

造成面推定範囲

ゲートボール場

古窯跡

会田小学校

会田中学校旧校舎

ゲートボール場

会田中学校旧校舎

S = 1 : 1,250



第9図 調査区の配置



第10図 調査地周辺の地割 (明治 24 年)

2 遺構（第2表、第11～19図、写真図版4～7）

検出遺構は石積、石列、溝状遺構、建物址、柱穴列、炉址等多岐にわたる（第2表）。これらの中で最も大規模で遺跡の性格を特徴付けるものは切土・盛土地業によって形成された平場である。その範囲は調査区を上回って周囲に広がる。また、平場は造成開始以前の旧地形面（古代～15世紀前葉）から、終焉を迎える1面（16世紀代）まで、大きく4段階の変遷を辿ることができる。ここでは地業に関わる遺構を中心に種別毎の概要を記す。

(1) 平場築造に関わる遺構—造成土・土塁・石積

ア 旧地形面（5面）の状況（第12・15・16・30図）

平場造成開始以前の地形は単純な南向き緩斜面ではなく、意外にも岩井堂沢の河谷に面した西半部が微高地、廣田寺裏の尾根に接する東半部が低湿地だったことが判明した。後者は尾根沿いに南下していたと考えられる自然流路に因み、地山は水成堆積の粘土やシルト層で構成されている。一方、微高地面は礫を含む黄褐色土を基盤に暗褐色の腐植土層が発達する。両者の比高は最大で1mを測る。遺構は、住1や溝1233等奈良・平安時代に遡るものから、中世（12～15世紀前葉）のピット・土坑まで、主に微高地上に分布の中心がある。また、縄紋時代前期の土器・石器が散布することから、微高地は中世に至るまで安定した状況にあったと考えられる。

イ 4面～1面の状況

ア) 造成土の状況（第15～17図、写真図版6）

平場の骨格となる整地土（造成土）は、各面の段階で色調、混入物、工法等に相違があり、特徴的なあり方を示す。それぞれ旧地形の傾斜下方となる南～東側で厚く盛られ、石積の背面等堅固な築造が必要な部分には版築が行われる。また、新しい面に移行する際には盛土をして地面のかさ上げを行う。しかし、どの面も単純に埋める訳ではない。例えば2面造成に際しては古い面を削平・整地してから新たな整地土を盛っている状況が窺える。

基盤整地土 調査区東半に広がる低湿地の整地や石積A・B、石列8等の土台構築を目的として広範囲に厚く貼られる。礫の少ない黒褐色ないし灰褐色を呈するシルトに意図的に多量の炭を混ぜ堅く叩き締める。

4面整地土 概して暗褐色を呈し、亜角礫を多量に含む。石積Aや石列8の背面では薄い黄褐色土層を交え版築を行っている。層厚はトレンチB南端付近で最大1mに達する。

3面整地土 窪地状地形面の埋立土である。層厚は最大1mを測り、風化泥岩屑や砂岩屑を多量に含む。黄褐色を呈する目の粗い土壌である。乾燥すると固く締まる反面、水を含むと急激に性状が変化し溶解する。遺物や炭を含まず、造成に際し風化岩盤層から削り出したものをそのまま埋め立てたと考えられる。下層に褐鉄層を形成する。

2面整地土 3面整地土と同質の風化岩屑土である。石積前空間の埋め立てに多量に使用され、表面化粧に粒度の細かい粘性土を用いる。調査区西部ではこの土壌がなく、4面整地土に近似する暗色系の土壌に入れ替わる。

1面整地土 2面とは一変し、炭を多く含む灰褐色土を厚く貼る。層厚0.1～0.5mを測る。この段階には平場背後の斜面を切土して北側にも拡張を進めており、この掘削土が造成用土に充てられていると考えられる。

1面を覆う整地土 平場の最終面である1面は廃絶後その直上を広く黄褐色土に覆われる。その性状から明らかに人為的な盛土であり、あたかも1面を密封するような状況を呈している。これより上位の土層は昭和28年のグラウンド造成以前の攪乱層や旧表土層である。グラウンド造成以前は伝染病の隔離病棟が存していたという。攪乱層はそれに伴うものかあるいは近世～近代の耕作によるもので、生活遺構はほとんど認められない。

石積前空間堆積土・土塁南堆積土 石積前空間には2面整地土に先行する厚い下層堆積土が見られる。石積側から廃棄された多量の木製品や細片化し半ば粘土化した風化泥岩屑を含む湿った層である。その下層には流入土とみられるシルト層がある。一方、土塁南空間は2面段階以降段階的に埋め立てが進行した状況が

窺える。上層には1面段階以降に廃棄された焼土・炭塊層が形成され、被熱した茶臼や焼物等の遺物を多く包含していた。

イ) 平場の範囲と形態 (第9・10・12～16・30～32図)

平場は4面段階以降順次拡張され、1面段階に最大となる。今回の調査では、整地土の分布範囲や切土面の把握、また区画施設である石積の検出によって、平場の北限および南限がほぼ明らかになった。他方、東西両端はいずれも調査区の外に広がるため確認できない。地形の状況や地割のあり方から見て、おそらく最大時の平場は、岩井堂沢の崖面を西限とし、東限を北から伸びる尾根(現在の道路付近)までとする東西約75mの領域である。西限は各段階でさほど変わらない一方、東限は各段階に埋め立て・拡張が進められた。

4面段階 4面の平場は石積Aを南限とし、整地土の末端を北限とする南北約21.4mの範囲である。東限は明らかでないが、南東部には窪地状地形面が大きく入り込むように設けられる。これは旧地形の低湿地に基盤整地土を盛土しただけの低い地面で、平場上からは緩い法面となって移行する。平場の南面を石積Aで区切るのに連動し、窪地状地形面は低い石積B1で南面を画する。後に触れるが石積Aには改修が認められ、また石列8がこれに先行する古い石積の可能性を残すため、本段階の中でも数回の改変があったものと推定される。なお、石積A手前の低い面(石積前空間)は平場に至る東西通路(入口施設か)と想定される。この状況を確認するために設けたFトレンチにおいて、石積Aから約7m地点を北法尻とする幅3.8m前後の土塁が検出された。その天端は石積Aとほぼ同レベルで、北法面の最上部に2段階みの石積Cを設ける。土塁は石積Aと平行で、石積前空間の外郭施設ともいえる。石積前空間は西側で石積Aの収束とともに上昇し平場に連なり、東側は石積B1沿いに延びていたのであろう。さらに、土塁と南側の地形面(現ゲートボール場)に至る段差の間にも幅6.5m程の空間が広がる(土塁南空間)が、今回の調査ではその様相を明らかにすることはできなかった。

3面段階 窪地状地形面を埋め立て平場とする。さらに石積B1の西部を増し積みし、南折する新たな石積B2を設け、南に張り出すスロープを造る。これにより石積B1は大半が埋没し、石積A・B2をもって南面が画される。さらに石積B3を新設することでスロープが西に拡張される。しかし、石積A・Bは平場の南面区画を目的としながらも別々に構築されている。その意図はわからないが、石積A-B間の土層状況や、石積B2の南面石積天端が屈折部側に一定勾配で上昇することから、ここには石積前空間と平場を結ぶスロープがあった可能性がある(第31図)。

2面段階 石積前空間を埋め、平場を南に拡張する。その南面は土塁天端付近まで、南北120m程の範囲に達すると考えられる。この段階では東部を除いて造成面のかさ上げがされる。南面はFトレンチの断面観察では石積は存せず、土塁の法面をそのまま利用していると捉えられる。

1面段階 前段階に続き盛土により全体的な造成面のかさ上げが行われる。西・南限の位置に大きな変化はない一方、本段階に及んで平場背後の切土が大規模に進められ、北限が大きく拡大する。前述のように、本段階の平場は第9図に示した灰色の範囲、中軸線上で東西75m・南北56mの範囲と推定され、東端はさらに広がる可能性がある。北側の切土面は一旦地山を削った後整地し緩い斜面とする。切土位置は明治24年の地籍図ともよく整合する(第10図中の道路A)。これらから導かれる平場の形態は、南面と西面が方形基調となる一方で、北面から東面は旧地形の制約を受け大きく屈曲した形態となる。また、西面の北端、すなわち現在旧会田中学校プールのある周辺が大きく西に突出していた可能性がある。

なお、1面では各所に炭・灰の散布が認められ、焼土824のような被熱面が存在する。また、同時期の形成と考えられる土塁南空間堆積土上層の炭・焼土塊層や、礎石・石列における石材の被熱痕、被熱した遺物等、断片的ではあるが火災の存在を窺える。

ウ) 石積 (第11・12・15・16図)

4面～3面段階の平場南面を画する石積の構造について触れる。ここで石積としたものは、本調査において平場の盛土周囲や土塁法面に礫が2段以上積まれた遺構で、石積A、石積B1・B2・B3、石積C、石列8が該当する。これらは時間的な変遷が認められ、特に石積BはB1→B2→B3への変遷が捉えられる。

石積A 4面の平場南面を画する東西33m、高さ最大1.2mの遺構である。その線取りは非常に直線的で、

トレンチ B 付近を頂点に約 2° 屈折する。構築は基盤整地土上に行われる。全体的な特徴としては、未加工の角礫・亜角礫を垂直に積み上げ、両端は高さを徐々に減じて収束させる。西側では石積前空間の上昇に沿って基底面も上昇する。裏込栗石を用いず版築のみで行う。いわゆる練り積みの手法で、築石接合部には粘質土を用いる。

築石の積み方は各部で異なり、便宜的に西側から a～e に区分した（第 11・16 図）。a は大型の石材を 1 段目に配し、その上に小さめの石材を 1、2 段積む。c・e がこれに準ずる。1 段目の築石は最大面を正面に向けて立てるため控えが非常に短い。築石間は適当な大きさの礫で間詰を行う。築石の高さが不揃いであるため横目地は通らず、上面に生じた起伏の凹部は小振りの平石を 1、2 段平積みして解消を図る。天端はほとんど残存しないが、控えの長い石材を小口積みにする、いわゆる牛蒡積みの手法が窺える。一方、各段を通して縦目地が通る部分が散見され、間詰石も単純に隙間にはめ込んだだけのような状況を呈する。

a が大型の石材を用いるのに対し、b・d では小振りの石材が多用される。b は比較的高さの揃った亜角礫を 6～7 段布積みし、また石材の長手を表に向けて積むため、a と同様に控えは短い。間詰石もほとんど用いない。

石積 A における積み方の二者は、a－b および b－c の接続部の状況から a→b の前後関係として捉えられ、修改築が実施されたことを物語る。なお、c から d にかけては上部が崩落し、当初の高さを失っていると考えられる。崩落した石材の一部は c の前で見られるが、大半は片付けられている。

石列 8 4 面造成土中で検出された、南北 2.5m・東西 0.7m 以上・高さ 0.85m の石積である。最初に南面石積を構築した後、西面石積を付加する。石積 A の築造あるいは修改築に伴って南部を破壊される。南面と西面石積の入角部は互いの築石が接するだけである。築石のあり方は石積 A の a と同じで、西面では 2m を超す平石を衝立のように立てる。本址は石積 A に先行する古い段階の平場前面石積と推定するが、建物遺構の可能性もある。

石積 B 調査区東寄りで検出され、東壁以東まで続く延長 22m 以上の遺構である。先にも触れたように、本址は 2 回の改変を受けている。石積 B1 は当初の遺構で亜角礫を 2 段積みする。西側は B2 段階で改変されるか、あるいは西に延長されている可能性がある。石積 B2 はまず B1 上部への積み増しを行い、その後 5 段前後の南折石積を付け加える。この手法は石列 8 と同様で、東西石積を築いた後に南北石積を積むため互いの面は接しているだけである。B3 と B2 の関係も同様である。B2・B3 の築石のあり方は石積 A の b とほぼ共通し、ほぼ高さの揃った小振りの自然石を垂直に布積みし、天端には牛蒡積みが行われる。

以上のように、石積 A・B は築石の控えが短い、裏栗石を施さない、入角部が噛み合わせ構造になっていない、隅角部を有さない、築石の縦目地が通ってしまう箇所がある等、土留め施設としての力学的効果はあまり期待できない。現に、石積 A の b 等では土圧によるせり出しが観察される。これらの石積はむしろ、大型石材の最大面を正面とする手法に見られるように、視覚的な効果を狙った構築物としての側面が強いと考えられる。

なお、今回検出された石積の帰属時期は、その基盤や裏込となる整地土出土遺物、石積前空間下層堆積土出土遺物、後行する 1、2 面出土遺物から判断して 15 世紀代の中に求めることができる。

そのほか、石積 A・B、石列 8 については築石の石材鑑定を実施した。各遺構とも輝石安山岩がほとんどを占め、石積 A で 97.2%、石積 B で 95.8%、石列 8 で 86.1% に達する。他に砂岩、礫岩が見られるがいずれも地山土や岩井堂沢で簡単に入手できる素材である。石材の構成比は岩井堂沢 2 地点で実施した河床礫の石材構成と同傾向を示し、意図的に選択・搬入した石材とはいえない。また、河川の下流で採取されたもの



石列 8 西面

石積 A 西部西半 (a)

石積 A 西部東半 (b)

石積 B 2・3

第11図 石積の構築状況

は少なく、多くが磨滅の少ない角礫ないしは垂角礫で、時に山キズと呼ばれる自然の割れ面が観察される。

(2) 区画に関わる遺構—石列・溝状遺構 (第 13・14・18 図)

各段階の平場は必ずしも水平面とは限らない。むしろ各面とも南北方向に一定の勾配があり、東西方向も緩く中央部が高まる。広大な平場は東西あるいは南北の石列や溝状遺構で区画され、空間の分割が行われる。とりわけ石列は各区画の高低差を調整する施設でもある。その代表例として1面の石列1～3がある。石列1は並列する2条の石列内部に栗石状の小角礫を詰め込み、築地塀の基礎と考えられる。石列の面処理のあり方からここを境に平場が段差になっていたと考えられる。石列1南側の空間には東面する石列2と、西面する石列3が対峙する。築石はほぼ2面直上に据えられ、1面形成までの過程で一時石列2－3間に1段高い面が設けられたと捉えられる。その後、石列の東西にも整地が行われ、最終的に1面が形成される。この中途の段階を1'面とする。断面観察の結果、1'面は石列3以東、石列1以南の範囲に広がっている。

4面の石列4は状況が異なる。大型の自然石を平置きし、全体としてL字形に配する。南北列は攪乱を受け石材が移動しているが、原位置を保つものはいずれも整地土中に埋め込まれ、2段以上に積まれた形跡が見えない。また上面を水平に揃えており、建物等の土台とも考えられる。

溝状遺構は直線的で石列や他の建物址等と軸を揃えたものが多い。これらは区画溝のほか、雨落や建築基礎等、建物址に関係するものもあると考えられる。

その他平場の区画に関連する遺構として、1面の調査区東壁下で検出された帯状の造成土がある。石列1と直交方向に延び、1面整地土上に盛り上げている。その状態は調査区東壁で捉えられるが、当初存在に気付かなかつたため東西断面は観察できなかった。位置的にみて土塁の可能性も考え得るが、今回の調査では判断し難い。

(3) 建物址—礎石建物址・掘立柱建物址・柱穴列 (第 12～14・19 図)

建物址や柱穴列は大半が整理段階で構成したもので、調査時に捉えられたものは僅かである。現状では十分な検討を経ていない仮設の段階のため、ここでは詳述しない。柱穴列の多くは柵と考えられる。柱列1・2・10等が代表例である。これらのあり方は松本市域の中世遺跡に通有で、掘り方は直径20～40cm程度、柱痕も10cmを超えない。中には礫を礎板とするものがある。いずれも柱間や列、深さが整然としないため、建物の認定が非常に難しい。

礎石は掘り方に有無がある。また、石材の多くが除去されていると考えられ、明確に建物址を構成できるものは少ない。また礎石としての認定を迷うものが多々あるが、ここでは一定の大きさの平石を水平に配しているものを積極的に礎石と捉えている。なお、礎石283は掘り方内に銭貨10点が埋納されていた。不鮮明ながらも礎石建物が存在することは、遺跡の性格を考える上で非常に重要である。

(4) 炉址 (第 12～14・17 図)

焼土遺構全般を焼土面とした。単なる被熱面もここに含まれるが、楕円形ないし隅丸方形の浅い掘り方を有し、中央部に火床が見られるものを特に炉址として捉えた。炉址は群在する傾向があり、2面では柱穴列13南側の南北3m・東西8mの空間に11基が集中していた。このうち、焼土368では火床面に内耳鍋が据えられ、内外に炭の堆積が見られた。この内耳鍋は炉の構成材として二次的に利用されたように見えるが、一方で使用状態あるいはそれに近い状態のまま廃棄された可能性についても検討する必要がある。

(5) 土坑・ピット・その他 (第 12～14・17・19 図)

土坑・ピットは単純に大きさで区別した。整理途上のためほとんど触れないが、特徴的なものとして1'面の土728・831・873がある。これらはいずれも長径が2mを上回り、すり鉢状の掘り込みを有する。土873では片側に配石が設けられ、底面に褐鉄の沈殿と砂層が認められる。土728も同様に褐鉄層と砂層が認められる。こうした状況から溜め井戸的な施設と推定され、土坑群の北東に存する流路(溝1158)との関係が注意される。1面の土877は集石を伴う浅い土坑である。こうした礫を伴う土坑は少ない。また、今回の調査では中世遺跡で多く見られる方形土坑や竪穴建物址の検出が皆無に等しい。この点は遺跡の性格を考える上で重要な所見である。

その他特徴的な遺構では1面のP872がある。18点の銭貨が差しを思わせる状態で出土した。



- 石積前空間堆積土中層の検出遺構
- 5面(旧地表・地山面)検出遺構



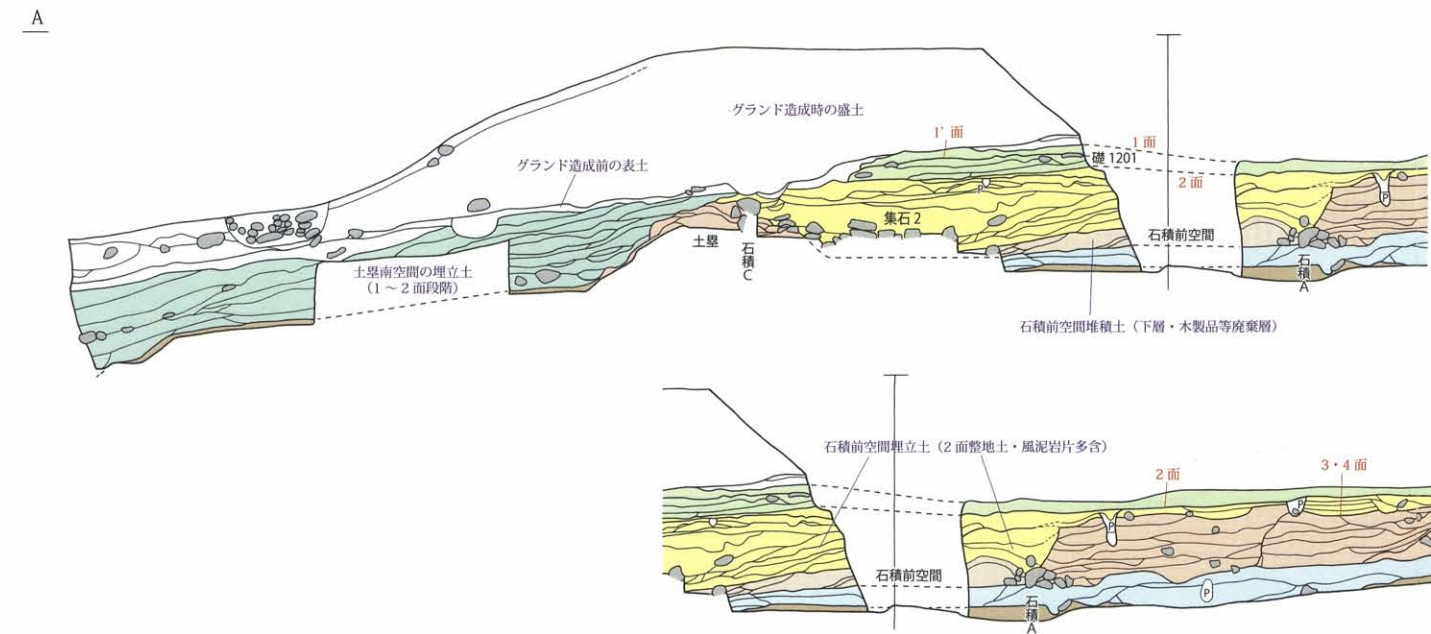
第12図 3～5面遺構全体図



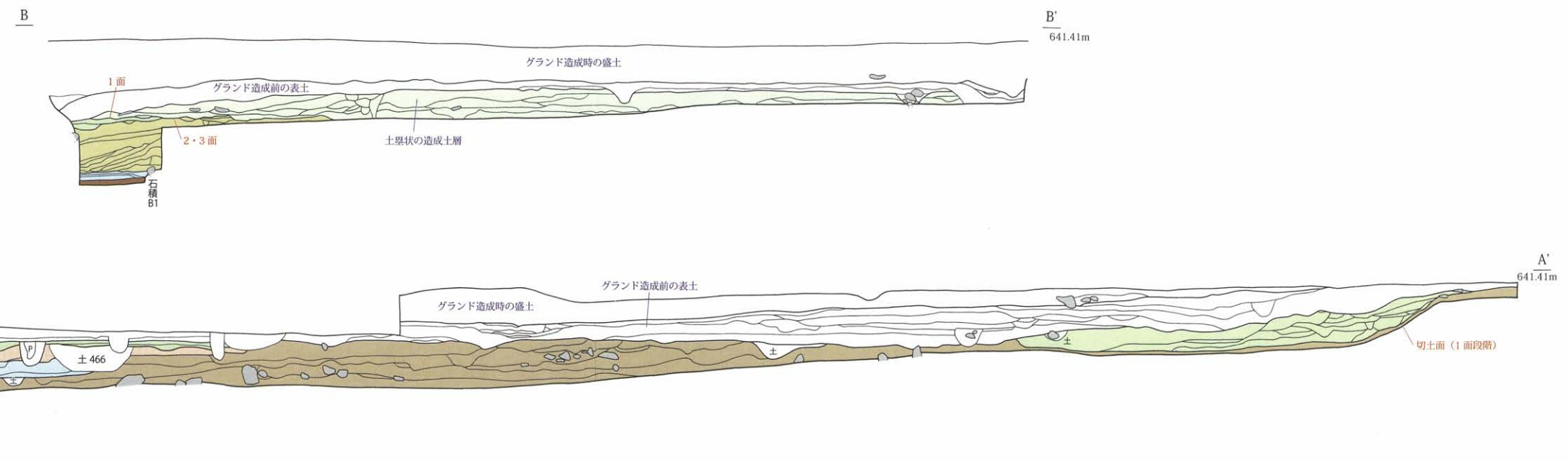
- ① 2面整地土面上で純粹に検出した範囲 (2面段階の遺構にほぼ限定)
- ② 2面と3面が同一検出面となる範囲 (2面と3面段階の遺構が混在)
- ③ 3・4面上で検出した範囲 (調査時2面を削平、3・4面段階の遺構が混在)

第13図 2面遺構全体図

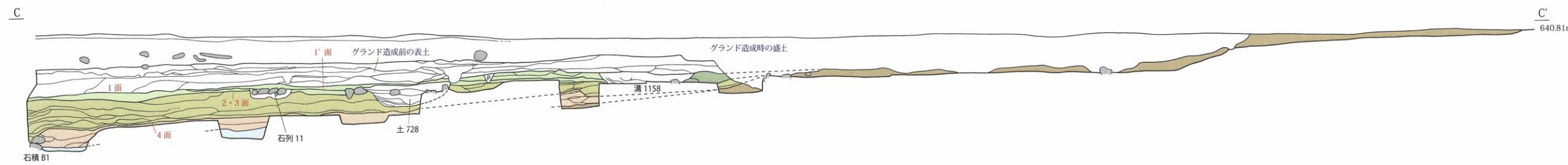
F トレンチ東壁-B トレンチ西壁セクション



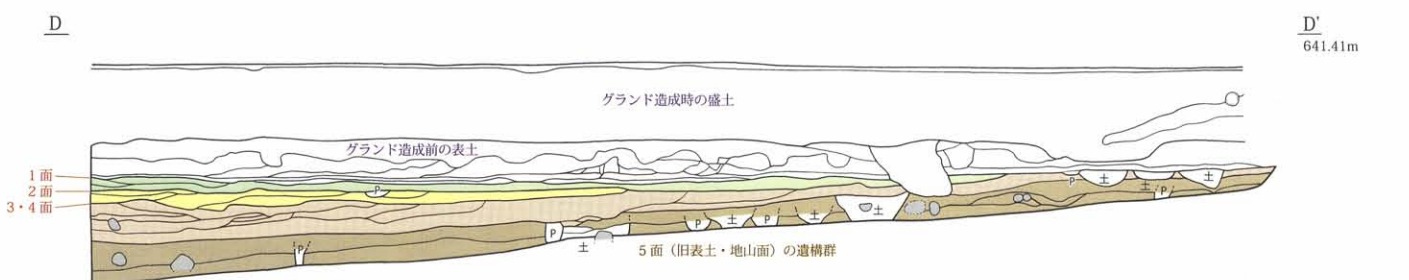
調査区東壁セクション



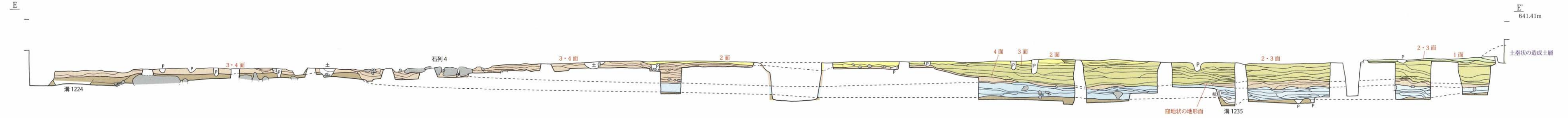
東トレンチ東壁セクション



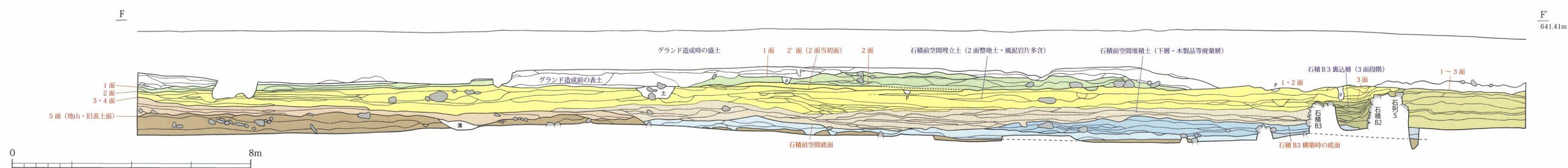
調査区西壁セクション



K トレンチ北壁セクション

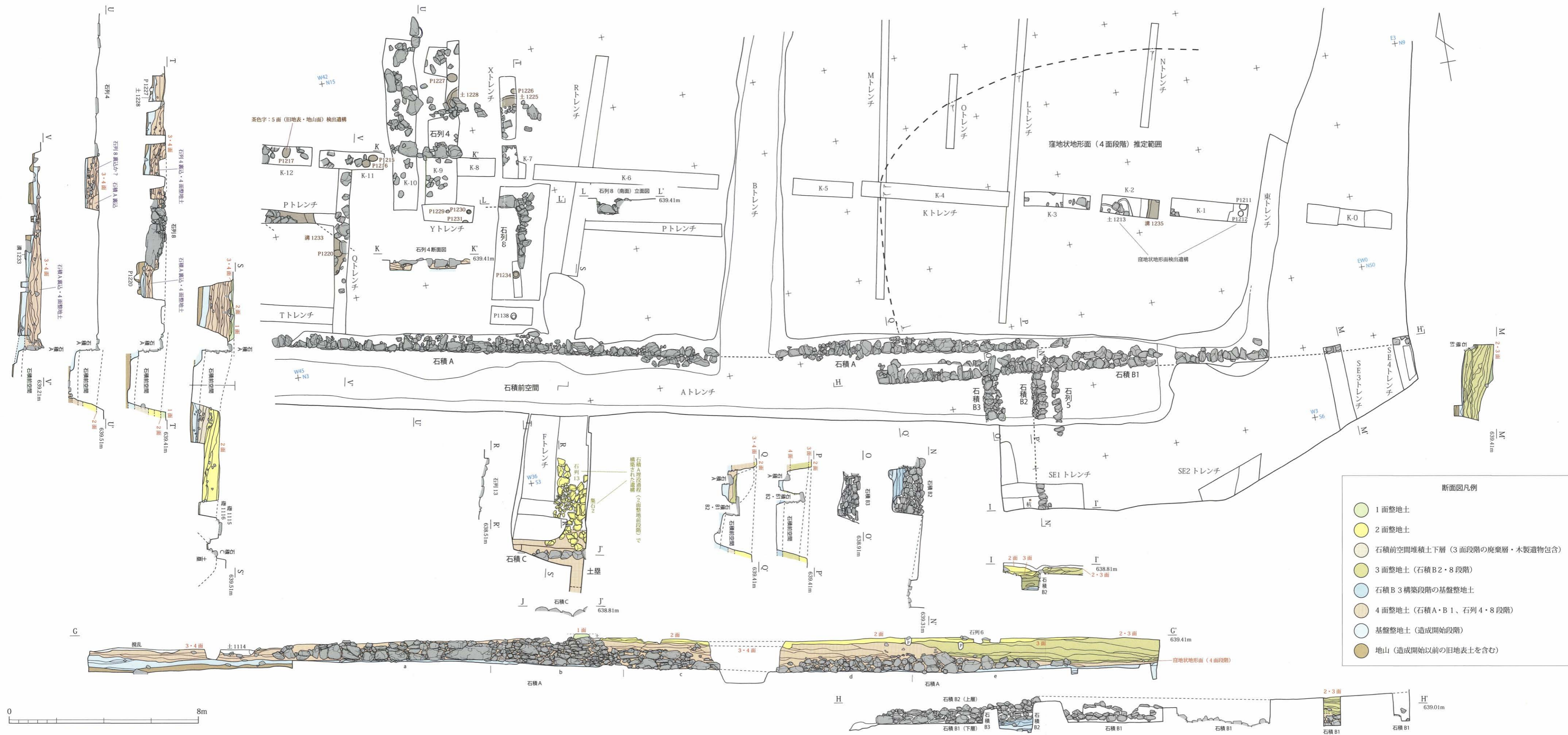


A トレンチ南壁セクション



- 凡例
- 1面整地土2
 - 2面整地土
 - 石積前空間堆積土下層 (3面段階の廃棄層・木製品等含む)
 - 3面整地土 (石積B2・8段階)
 - 石積B3構築段階の基盤整地土
 - 4面整地土 (石積A・B1、石列4・8段階)
 - 基盤整地土 (造成開始段階)
 - 地山 (造成開始以前の旧地表土を含む)

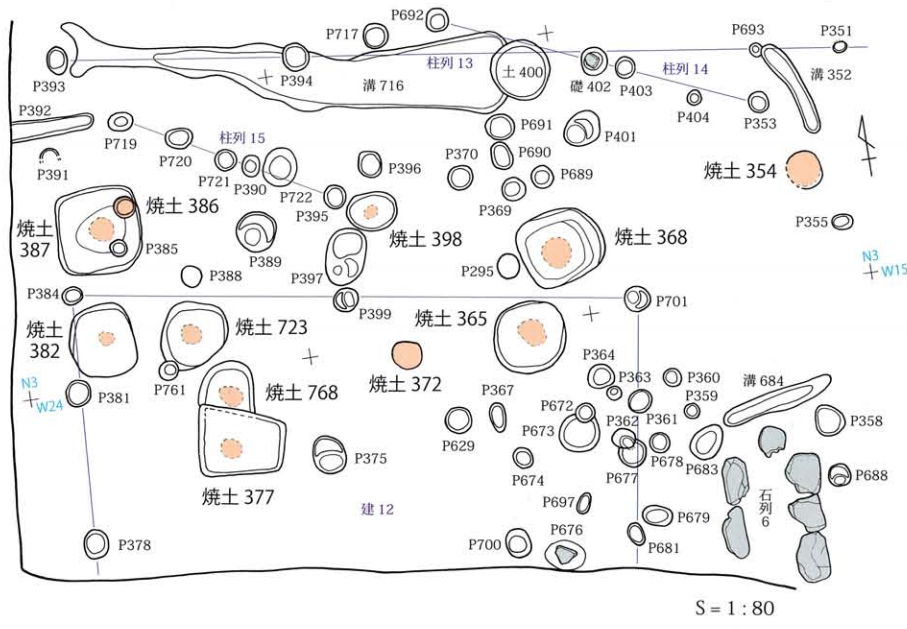
第15図 調査区土層断面図



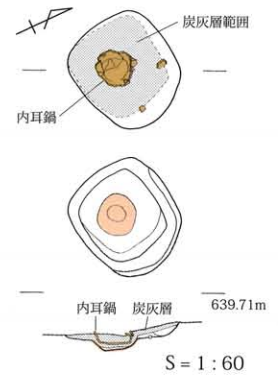
- 断面図凡例
- 1面整地土
 - 2面整地土
 - 石積前空間堆積土下層 (3面段階の廃棄層・木製遺物を含む)
 - 3面整地土 (石積 B2・8段階)
 - 石積 B3 構築段階の基礎整地土
 - 4面整地土 (石積 A・B1、石列 4・8段階)
 - 基礎整地土 (造成開始段階)
 - 地山 (造成開始以前の旧地表土を含む)

第16図 3・4面検出遺溝 (石積・石列)

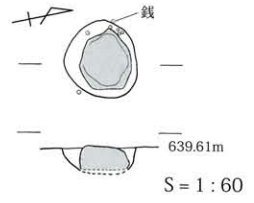
2面炉址群



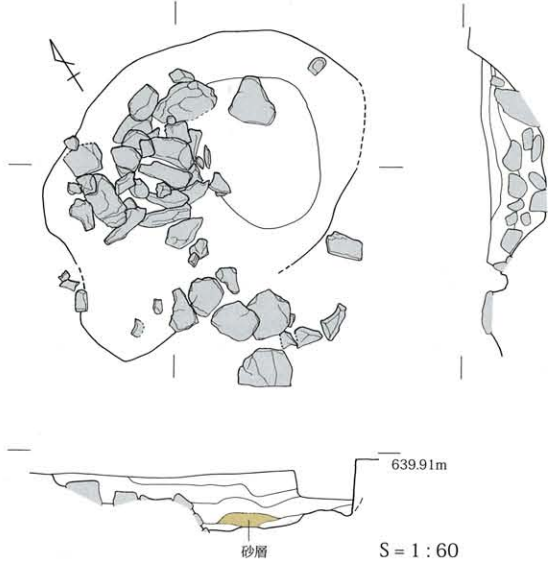
焼土 368 (2面)



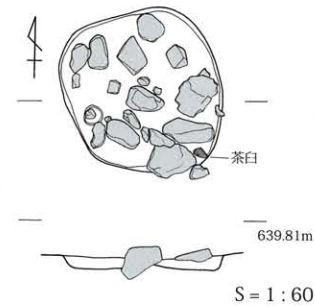
礎石 283 (1面)



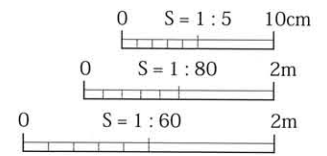
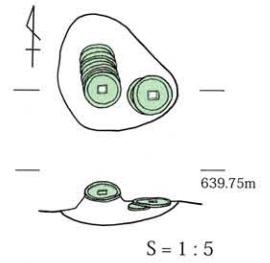
土 831 (1面)



P877 (1面)



P872 (1面)

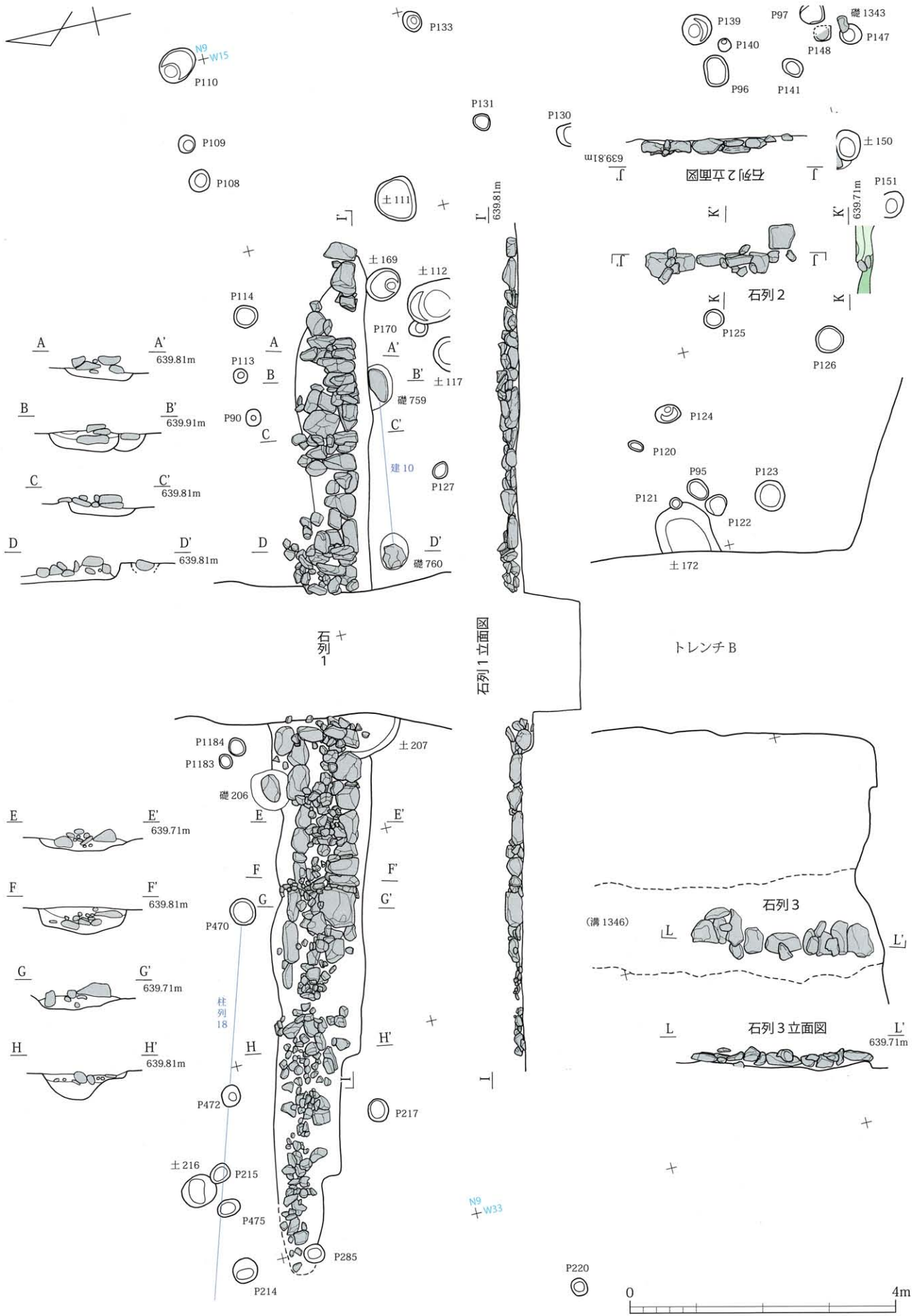


焼土 368 内耳鍋と炭灰層の状況

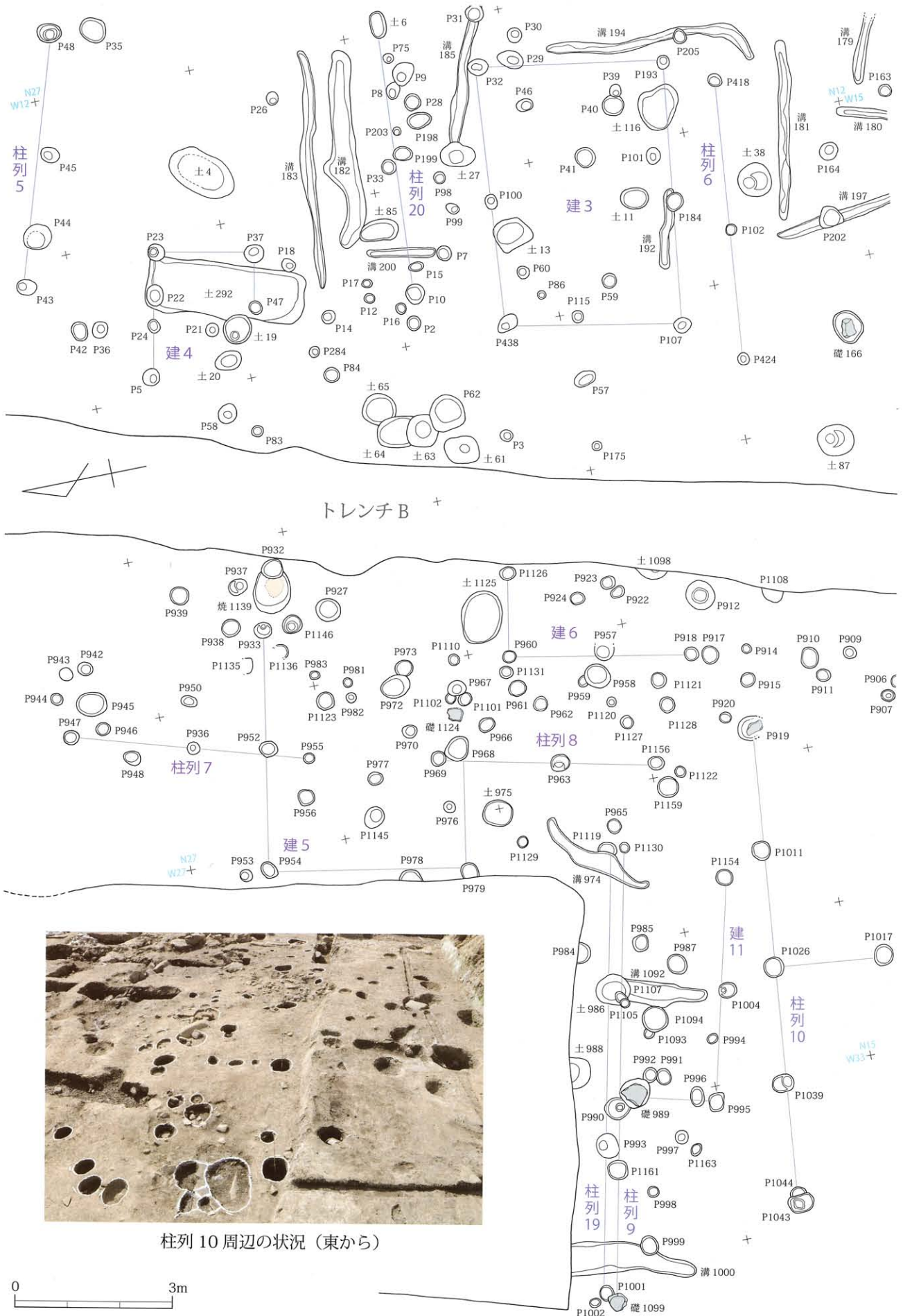


礎石 283 掘り方内の銭出土状況

第17図 1・2面検出遺構 (炉址・土坑他)



第18図 1面検出遺構 (石列)



3 遺物

今回の調査では第2表に示したように多種多様な遺物が出土した。その整理はまだ途上であり、本書では主要なもののみかいつまんで提示することとした。遺物の数量的な傾向は、松本市域の当該期集落跡に比較して焼物の出土量が多いが、傑出する量とも言い切れない。そのうえ細片資料が多く、一括出土した完形資料はわずかである。これらの中で、とりわけ焼物や石器に見られる喫茶道具や、中国製品は注目に値する資料である。

(1) 焼物 (第20～23図・写真図版7～9)

中世の焼物については全般的に原明芳氏、市川隆之氏、竹内靖長氏、降矢哲男氏の指導を受けた。古瀬戸系陶器は河合君近氏に指導を依頼し、藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』(高志書院)を参考にした。また、大窯製品、中国産天目茶碗、青磁を含め調査指導委員の小野正敏氏、水澤幸一氏のご指導を受けた。

土師質土器 皿 (1～70) 在地産と推定される素焼きの皿(カワラケ)である。松本市域の中世遺跡としては多くの資料が得られた。体部のロクロナデが確認できない1点以外は全てロクロ成形で底部は回転糸切りを行っている。本書では内面見込みに行われる特徴的な成形技法のあるものを抽出し、3タイプに分けて分析を行った(第23図)。また法量について各面ごとに分布状況を示した。これらについては第IV章で述べる。

皿全体を概観すると灯明皿として利用されたものが目立つ(2・13・15・19・20・22・24・27・43・68)。特に4面段階での出土が多い。また、2面段階の43は穴(P761)に正位に埋められた状態で出土し、祭祀行為に伴うものかと推定される。加えて体部に小穿孔が施されたものがあるが(55・56)これらも儀礼的な場面で使用された可能性がある。また色調が淡褐色～灰白色を呈する精製された皿が目立つ(6・25・31・40・41・49・59・60)。これらは京都産の白カワラケを意識して作られたものと思われる。

土師質土器 内耳鍋 (71～84) 内側に吊るし用の把手(耳)がつく特徴的な土鍋である。形状の分かるものは2点ある(75・76)。口径は26cm前後、器高17cm弱である。75は口縁部がほぼ直立しているのに対し76は外反している。その他77のように内湾するものもある。何れも内面にナデによる凹線が1本ないし2本明確に確認できる。これは市川隆之氏による内耳鍋分類のB類にあたる(市川1999)。1次調査では4面段階で内耳鍋が出土しているが小破片や胴部などで、B類に先行するとされるA類であるかは確認できない。3面段階のものも口縁部は耳の部分であるため分類ができず、2面段階からB類が確認される(73・74・75)。市川氏はB類を15世紀後半～16世紀初頭の中に位置づけており、2面段階の遺構面の年代を知る上で古瀬戸系陶器とともに有力な資料となる。B類は1面段階でも確認できる(76・77・78・79・81・82)。なお84は出土層位が不明だが、屈曲部に強いナデのあるC-1類とみられ、16世紀中頃の要素も認められる。

山茶碗 (85) 碗が1点出土している。重ね焼きをするための粉殻痕が高台端部に明瞭に残っており、藤澤良祐氏の山茶碗編年(藤澤2008)の第4型式(12世紀中葉)に該当するものと判断される。

古瀬戸系陶器 天目茶碗 (86～90・92) 1次調査で出土した古瀬戸系陶器は全て後期様式(14世紀後葉～15世紀後葉)に属す。器種は11種類を数え、室町時代には幅広く瀬戸産の陶器が搬入されていたことが窺える。その中で内外面に鉄釉を施した天目茶碗は茶臼や風炉とともに喫茶の道具揃えとして欠かせないものだった。主に破片で出土するためなかなか全容を知り得ないが、86は接合によって高台部から体部の様子がわかる。内反り高台の天目茶碗Ⅱ類で、高台径は狭く高台周辺は錆釉が施されず露胎である。体部はやや直線的に伸びることから第2型式に該当するだろう。古瀬戸後期Ⅲ期(15世紀前葉)と推定される。

中国産陶器 天目茶碗 (91・93～95) ここに提示した内93～95は胎土が暗灰色系で灰色系の古瀬戸とは明らかに異なる中国産天目茶碗である。ただ91は古瀬戸後期Ⅱ期の可能性も示されており今後の検討課題である。高台部が残らないため時期の特定はできないが、古瀬戸以外に本場の天目への志向が窺える。

大窯 天目茶碗 (96) 胎土が黄灰色系で古瀬戸とは異なる。15世紀末以降に瀬戸・美濃の大窯で焼かれた製品と推定される。高台部分が残らず時期の特定が難しい。

瀬戸・美濃系陶器 (97) 器種は不明だが胎土から瀬戸・美濃産と推定される。体部に灰釉が付着する。

古瀬戸系陶器 平碗 (98) 内外面に灰釉を施す。口縁部がわずかにくびれ、後期Ⅱ期かⅢ期に該当する。

古瀬戸系陶器 縁釉小皿 (99) 灰釉を施す後期特有の皿である。小型化しており口径が10cmを切る。底部内面周辺は釉をかけず露胎である。後期Ⅳ期新段階(15世紀後葉)に属す。

古瀬戸系陶器 豆皿 (100) 内面に灰釉を施した小皿で、口縁端部がやや反る。後期Ⅱ期かⅢ期に属す。

古瀬戸系陶器 卸皿 (101・102) いずれも口縁部のみが残る。内外面に灰釉を施す。102は内面に卸目が確認できる。101は口縁内側に小突起がみられる。後期Ⅰ期かⅡ期のものである。

古瀬戸系陶器 折縁深皿 (103～109) 灰釉を施した底の深い皿で、調理の際用いたものと思われる。全容は104で窺うことができる。口縁部を一旦外折し端部を内側に折り返す。これにより口縁上面のほぼ中央がわずかに膨らむもの(103)、口縁上面中央に小突起が形成されるもの(104)、小突起が中央より内側にあるもの(105・107・109)の3タイプがあり、後期Ⅰ期(14世紀後葉)→Ⅱ期(14世紀末～15世紀初頭)→Ⅲ期(15世紀前葉)と変遷が追える。106と108は口縁端部を折り返さないもので内面に小突起が形成される。後期Ⅳ期新段階(15世紀後葉)に該当するが、この口縁部の形態は卸目付大皿の可能性もある。

古瀬戸系陶器 直縁大皿 (110・111) 口縁部のみではあるが、110の推定口径が28cm弱であることから大皿と推定される。110は端部がやや反り、111は丸くおさまる。後期特有の直縁大皿であろう。

古瀬戸系陶器 碗形鉢 (112) 高台周辺をのぞき灰釉が施される。後期特有の器種である。幅のある付け高台で底部が内側に反っている。後期Ⅰ期(14世紀後葉)に属す。

古瀬戸系陶器 瓶子 (113) 鉄釉を施した瓶子Ⅲ類(根来形瓶子)の頸部で後期特有の器種である。

須恵質土器 搗鉢 (114・115) 体部の破片2点である。搗り目が確認できるが摩耗が激しい。

瓦質土器 搗鉢 (116) 内外面とも灰褐色を呈する。指頭圧痕が残り、搗り目が5本確認できる。

土師質土器 搗鉢 (117) 在地産と考えられる。搗り目が残り、11本で1単位であったことがわかる。

古瀬戸系陶器 搗鉢形小鉢 (118) 口縁部に薄く鉄釉を施す。後期後半特有の器種である。後期Ⅲ期か。

古瀬戸系陶器 搗鉢 (119～122) 内外面ともに錆釉が施されたもので後期後半特有の器種である。119はⅠ類、120・121がⅡ類で後期Ⅳ期(15世紀中葉～後葉)に属す。122は搗り目が確認できる。

瓦質土器 風炉 (123～127) 茶の湯の際釜をかけ湯を沸かす炉(火鉢)である。123は口縁部で外面に3本の凸線をめぐらし、上部に雷文、下部に蓮子文を押捺している。外面は黒灰色で、端部は燻銀色である。123・124・126は胴の部分で、126は赤褐色を呈する。火窓の部分の確認できる。127は2本の凸線の間には花菱文が押捺され蓮子文で区画する。円筒型の底部に施された文様帯と推定される。

白磁 (128・129) 128は頸部のつなぎ目がある。四耳壺と思われる。129は大玉縁の碗である。

青磁 (130～137) 鎊蓮弁文の碗(131・137)・無文で口縁部が外反する碗(134・135)・外面口縁部付近に雷文帯をもつ碗(133)・蓮弁文の鉢(130)がみられ、13世紀代から15世紀代に至る幅広い時期の青磁が殿村遺跡にはもたらされていたことがわかる。132・136は高台部で見込みに印花文が施される。

常滑 (138・140) 138は甕の折り縁の口縁部で縁帯が4cm以上あることから常滑焼生産地編年(赤羽一郎・中野晴久1995)の8型式(14世紀後半)に該当する。140は甕の底部である。

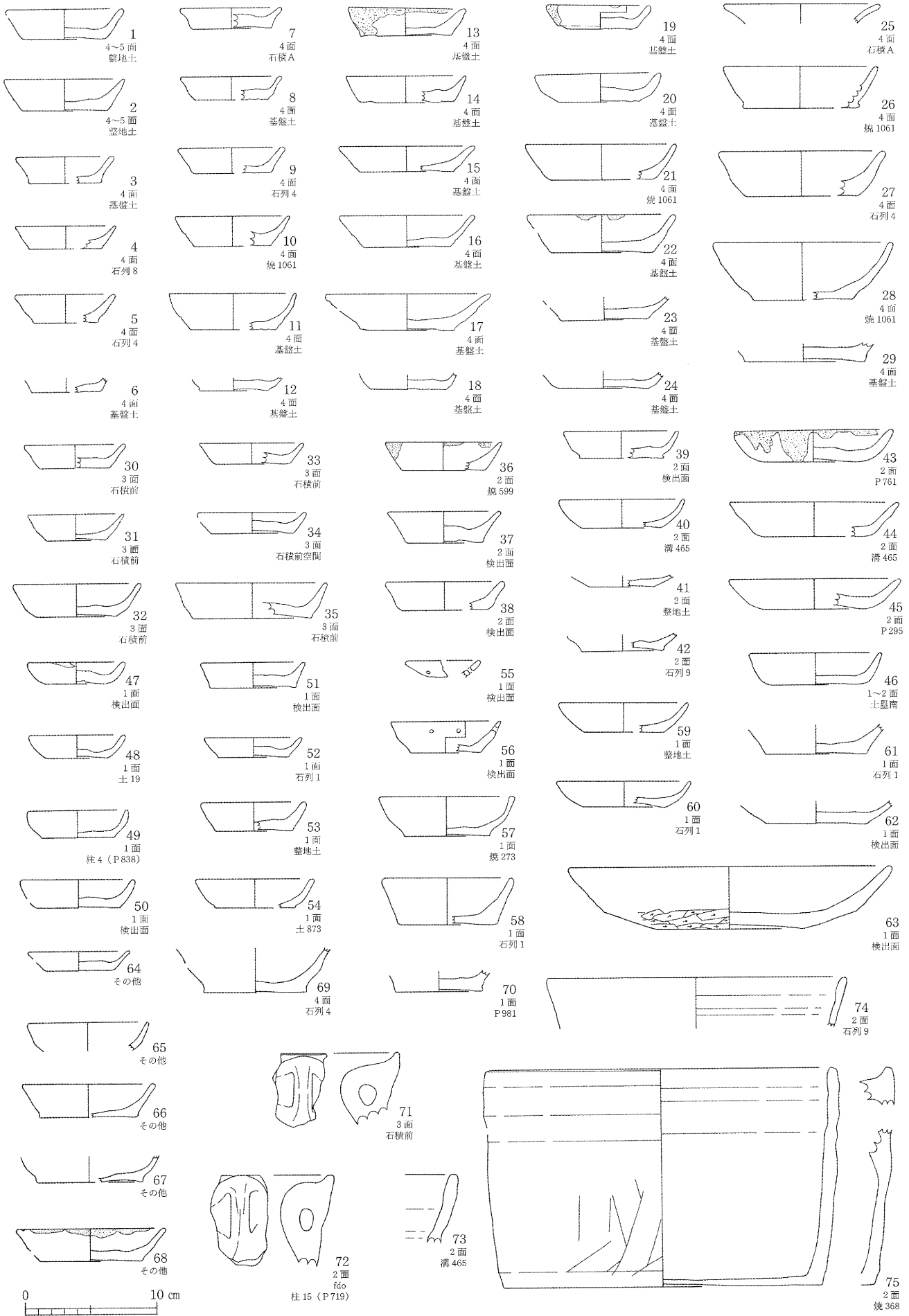
珠洲 (139) 甕の胴部で外面にタタキ目がある。13世紀代のものと推定される。

中国産陶器 壺 (141) 体部に鉄釉を施している。同一個体と思われる肩部片があるが接合できず、底部が残る部分の実測を行った。15世紀頃のものとして推定される。器形と鉄釉のかかり具合からみて茶壺の可能性が高いと思われる。おそらく古瀬戸後期の祖母懷茶壺のモデルとなったものと推定される。

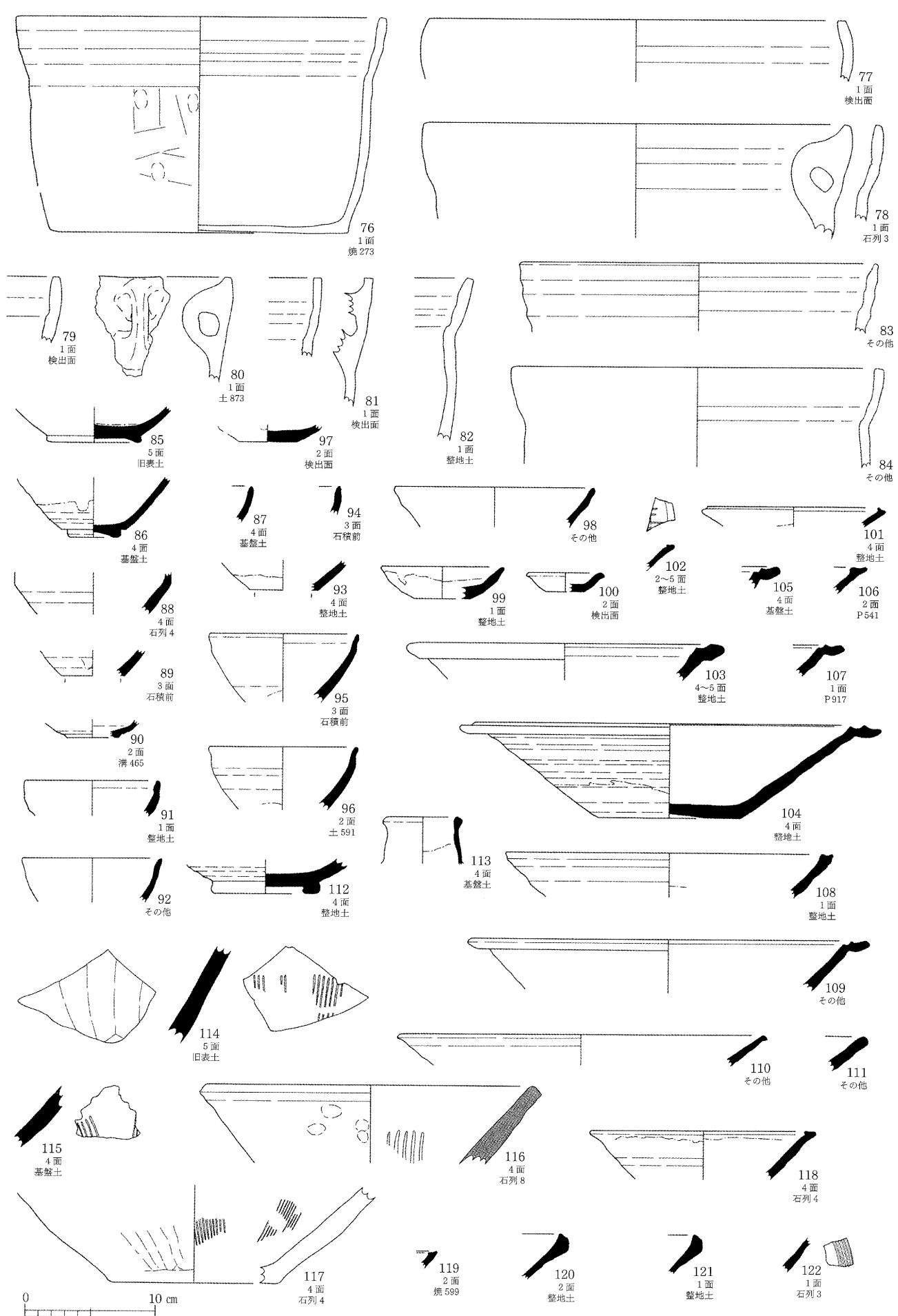
<引用文献>

赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』小学館

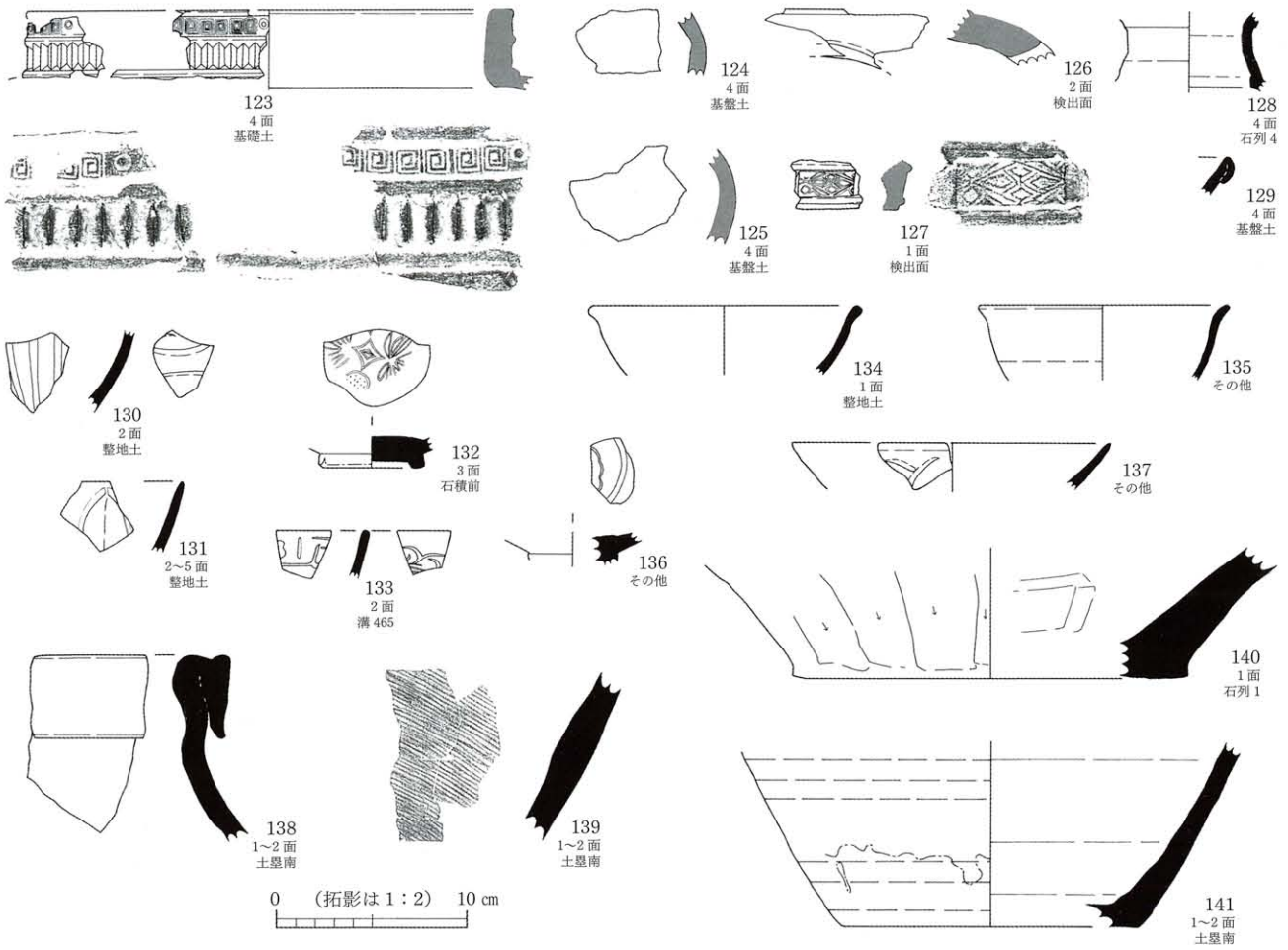
市川隆之 1999 「第4章第3節 出土遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書9-長野市内その7-小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡』



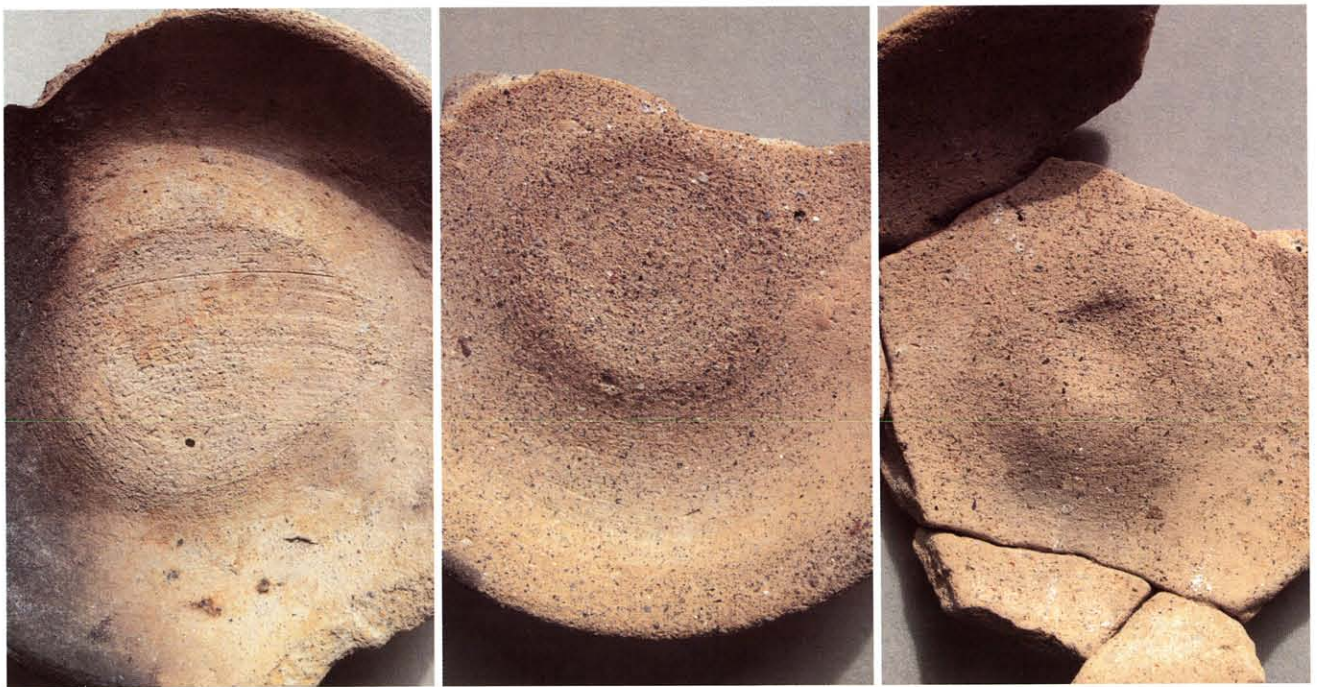
第20図 焼物 (1)



第21図 焼物 (2)



第22図 焼物 (3)



Aタイプ

Bタイプ

Cタイプ

第23図 土師質土器皿の内面調整

(2) 石製品 (第 24 図・写真図版 11)

今回の調査では合計 132 点の石器と石製品が出土しているが、ここでは本書の性格を考慮し、中世に帰属する可能性のある 36 点の石製品のみを扱うことにした。内訳は石臼 (茶臼・粉挽き臼) 12 点、硯 8 点、石鉢 6 点、砥石 4 点、不明 6 点がある。特徴のあるもの等を含め、その内の計 17 点を図示した。

石製品の時期区分は共伴遺物に相当するものとし、硯や粉挽き臼、砥石は 13 世紀後半から 15 世紀代に帰属すると推定される。また、茶臼や石鉢は 15 世紀になってから流通しはじめるので、それ以降の製品と考えられる。これらの中で特筆すべきものは、鳴滝産の硯 2 点と閃緑岩製の茶臼 8 点である。これらは出土した石製品の中でも特に高級品であると考えられるため、本遺跡の性格を知るための重要な資料である。しかし、質の高い遺物がある一方で、出土量としては比較的少なく、石製品のみから本遺跡の全体像を捉えることは難しい。さらに、熱を受けた影響で、表面が変色したり割れてしまった資料が多数あることに特徴がみられる。

鳴滝産の硯 (1・5) は石積前空間 (3 面段階) から出土している。1 は長軸に割れ、海部の一部が欠損する。5 は表面全体に熱を受け赤変し、海部が欠損する。これらは京都丹波地方で産出・生産されたもので、高級な石材として扱われていた。近代では仕上げ用砥石として使用されることが多い。その他の硯は一般的な頁岩製や粘板岩製、泥岩製、凝灰岩製である。灰色から緑がかかった色調の凝灰岩製である 4 は硯縁に突起の装飾があるなど、表面に特徴がみられる。背面等に線刻を有する資料は無かった。

茶臼はすべて被熱の影響で割れているが、接合資料はほとんど認められなかった。上臼はいずれも白面が認められたが、下臼は受け皿の縁部のみが出土した。白面を観察すると、いずれもよく使い込まれた印象がある。石材は閃緑岩製と安山岩製がある。前者には、特に偏光顕微鏡下で剥片観察を行い変質微閃緑岩と鑑定されたもの (12) がある (注 1)。これらの製品は緻密な石材で、研磨も丁寧に施されおり、高級品であることがわかる。会田盆地周辺には産出しない石材であり、持ち込まれた製品であると考えられる。閃緑岩製茶臼はすべて土壘南空間 (1~2 面段階) から出土しており、白面の遺存状態は比較的よく、八分画十溝のものが多く。全国的にデータが少ないため、石材から茶臼の産地を特定することは難しい。6 の挽手孔は三重菱形に、7 は三重正方形に装飾が施されており、9 は三重正方形もしくは菱形の挽手孔の縁部のみで出土した。茶臼は茶道具の一つとして当時、武家や寺院など喫茶を嗜んだ階層が使用していたものであると言われているため、これらの茶臼が出土したことは本遺跡を解釈する上で重要である。

粉挽き臼と石鉢はいずれも安山岩製である。これらの石材は、本遺跡周辺の河床 (岩井堂沢や会田川など) または地山層中に多数存在する輝石安山岩とは違った岩相を示す。13 の白面は磨滅が強く、分画数や溝数の観察が困難だが、ふくみは 25mm ある。石鉢はノミで整形された痕が全点で確認できる。いずれも欠損品であり、一部表面ないし割れた断面が焼けている資料もある。14 は、4 面の石積裏込土と焼土 1061 からそれぞれ出土した接合資料である。

砥石の出土量は少なく、砂岩製が 3 点、片岩製が 1 点出土したのみである。17 は 4 面の検出面から出土しているが、形状的には中世より新しいものである。石材から中砥ないしは粗砥である。半分に折れているが、砥面 4 面とも擦り減り方が大きい。片岩製砥石は、平滑面や線条痕を有するが、断面形状の不整さを見ると、流通したものではなく、手近の石を砥石として使用したと考えられる。残りの 2 点は在地産で、一般的にみられる褐色~橙色系の砂岩である。

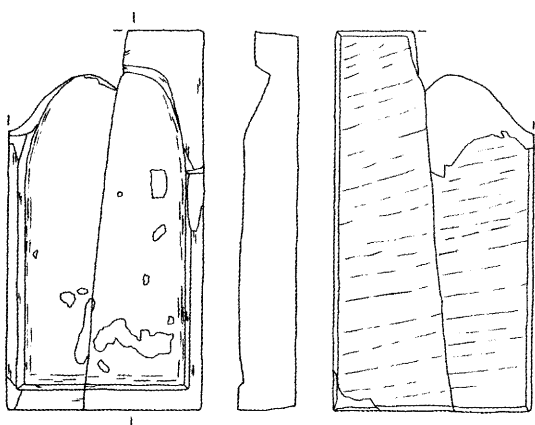
不明品の 6 点はいずれも破片で、器種同定は困難だが、粘板岩製、又は頁岩製で研磨面を有していることから、硯か砥石の一部であった可能性がある。

<注 1 >

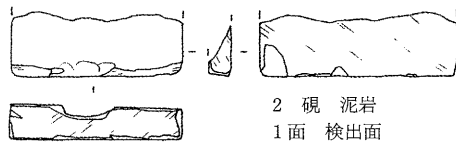
外部機関に委託した。詳細は他の化学分析結果と併せて本報告に掲載する予定

<引用文献 >

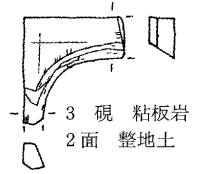
1928「第 6 章茶臼」『ものと人間の文化史 25・臼 (うす)』法政大学出版部



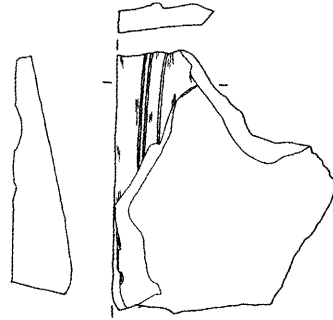
1 硯 頁岩
3 面 石積前



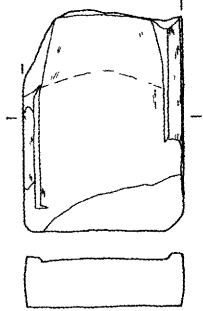
2 硯 泥岩
1 面 検出面



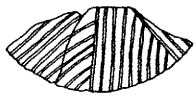
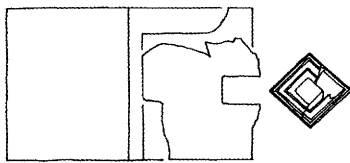
3 硯 粘板岩
2 面 整地土



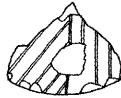
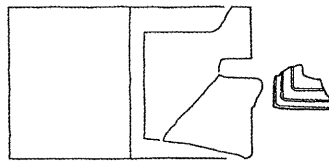
4 硯 凝灰岩
1~2 面 土壘南



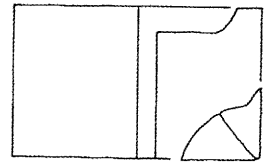
5 硯 頁岩
3 面 石積前



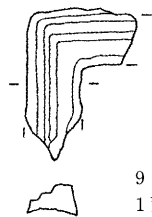
6 茶白 閃緑岩
1~2 面 土壘南



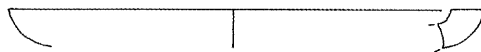
7 茶白 安山岩
1 面 土 877



8 茶白 閃緑岩
1~2 面 土壘南



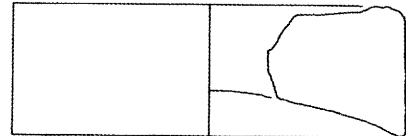
9 茶白 安山岩
1 面 検出面



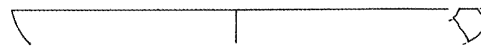
10 茶白 閃緑岩
1~2 面 土壘南



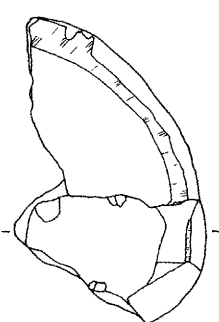
10 茶白 閃緑岩
1~2 面 土壘南



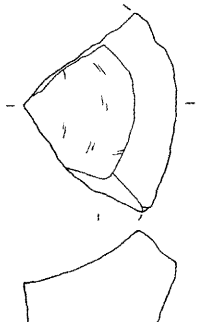
13 石白 安山岩
1 面被覆土



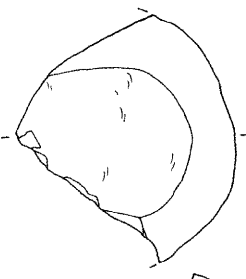
12 茶白 変質微閃緑岩
1~2 面 土壘南



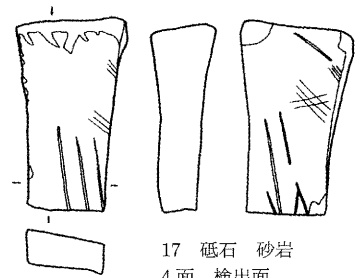
14 石鉢 安山岩
4 面 焼 1061+整地土



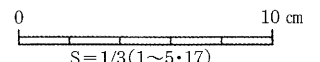
15 石鉢 安山岩
2 面 整地土~基盤土



16 石鉢 安山岩
1 面 土 825



17 砥石 砂岩
4 面 検出面



S=1/3(1~5·17)



S=1/6(6~16)

第24図 石製品

(3) 木製品 (第 25 図・写真図版 10)

1 次調査においては、石積前空間の下層堆積層 (3 面段階) および基盤整地土 (4 面段階) から大量の木質遺物が出土した。その中で木製品として捉えられる遺物を抽出して掲載した。製品以外に木材の加工に伴って発生する削屑、加工木材を成形する際に発生する端材などが多量にみられる。これらの樹種はほとんどがサワラであり、地元産の木を使い建築を含めた木材加工等の作業が付近で行われていた可能性が高い。

なお木製品、特に漆器碗については調査指導委員の水澤幸一氏から指導を受けた。

下駄 (1~3) 3 点とも台檜円形で、歯を柄 (ほぞ) で接合する差歯下駄 (露卯下駄 = ろぼうげた) である。柄穴は前後一つずつで、3 のみに後部の歯が残存する。前部の緒孔は 3 点とも中央にあけられている。

円板 (4) 小型の円形をした板の一部である。曲物の底板である可能性があるが、側面に側板を接合した木釘等の痕跡は残っていない。断面が台形状になるため、蓋として使用したものとも考えられる。

漆器 (5・6) 5 は小型の椀で酒器の可能性はある。6 は椀の蓋で縁が焼けて炭化している。両者とも内面に赤漆、外面に重ね塗りで黒漆を施している。この技法は 14 世紀以降にみられるものとされている。特に 6 は塗りも良く、外面に赤漆で精密な文様が描かれている。

短冊状板 (7~15) ここで示した 9 点はほんの一部であり、これらを含めた 128 点の短冊状の板について長野県立歴史館に依頼して赤外線照射を行い、墨書の有無を確認した。その結果 7・8 の 2 点に墨書が認められた。モニター画面の写真撮影を行い、図化を試みた。7 は最初の一文字は確認できるが、以下が一文字か二文字かは表面が潰れているために判断ができない。一文字目は「浄」のようにも見えるが断定は難しい。8 は中央に墨痕が確認できるが読みは不明であり、双方とも今後の鑑定が必要となる。

短冊状の板は切り落としあるいは切り折りによって木口を成形している。表面は刀子等で削り調整したもの (10・11)、滑らかな表面を持つが調整法不明のもの (9・12・13・14)、割りっぱなしのもの (15) とバリエーションがある。なお、9・11・14 には穿孔が行われ、11 は二つの小孔が底板と接合されたものともとらえられ、折敷の側板の可能性もある。生活用品としての木製品が少ない中、これら大量の板がどのように消費されていたかを解明することが課題となる。

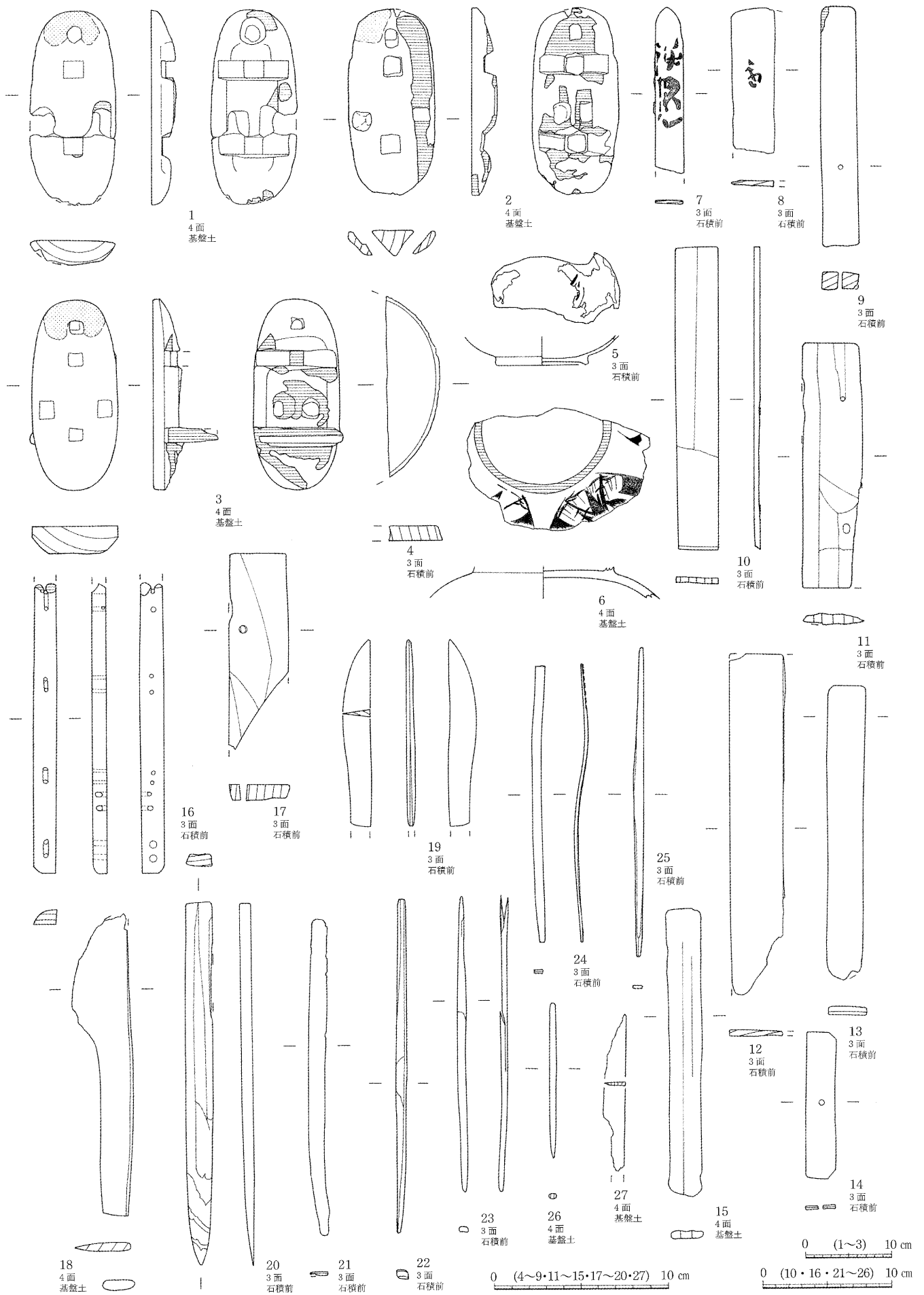
部材 (16・17) 16 は側板に接合し枳板としたものと推定される。全長は不明であるが、表面 (図左) には 2 つ 1 セットで 8 つの穿孔が行われている。セットになる孔の間には溝が施されていることから桜の皮等で側板と結節されたものと考えられる。17 の使用法は不明であるが、一端の木口が弧を描くようにシャープに切られている点が注目される。この部分が他の部材との接合面となり、釘打ちされたものと推定される。

狭匕 (18) 江戸時代の『和漢三才図会』の「厨房具」に掲載されている、樽の味噌をこそぎすくう道具である狭匕 (せかひ) と形状が同じである。松本城三の丸跡小柳町に近世の出土事例がある。

刀形 (19・27) 古代からの系譜をひく祭祀具の形代 (かたしろ) の一種と推定される。19 は切先と刃がきれいに成形されている。27 はやや粗い成形であるが切先と刃、茎 (なかご) が作り出されている。

串状木製品 (20・21) 下端を剣先状にしたものである。20 は上端を切り落とし、下端を鋭く尖らせている。21 は上端に側面ケズリを施し台形状となる。下の剣先部の加工は側面を左右交互に削ったため若干蛇行した形になる。この成形技法は平安時代以前の齋串と同様であり、その系譜をひく祭祀具の可能性はある。

箸状木製品 (22~26) 中世の木製品で箸ではないかとされる棒状のものがある。殿村遺跡においては現在分類整理中であるが破片を含めて数百点に上る量が出土している。ただすべてが箸かどうかという疑問がある。今回は特徴的な 5 点を図示した。仮に削り出しによって加工された 22 を典型的な箸と捉え、他の 4 点をみると、24・25 は非常に薄手に加工されている。また 26 はかなり小型である。注目されるのは上端部と中央部に切り込みが施された 23 で、これは古代の齋串にもみられるが紙あるいは布の御幣をはさんだもの (幣串) と推定される。箸等に混じってこのような中世的な祭祀具も多く含まれている可能性が高く、形代等も含めて遺跡の性格を考える上でも重要な資料となるため本報告に向けての分析を進めていきたい。



第25図 木製品

(4) 金属製品・鍛冶関係資料・ガラス製品 (第 27 図・写真図版 11)

ア 金属製品 (1～10・15～37)

金属製品は攪乱等の出土品も含め 95 点 (鉄製品 30 点・銭貨 61 点・その他の銅製品 4 点) ある。松本市域の当該期遺跡に比較して、焼物の出土量が多い割には鉄製品や銭貨以外の銅製品の種類・量が少ない。器種の内訳は、鉄製品に釘、刀子、その他不明品、銅製品に銭貨、不明品があり、そのうち 10 点を示した。

1～7 は鉄製の角釘である。1・2 は錆膨れがほとんどない良品で、中世に多く見られる巻頭である。3 は頭部を欠損するが側面にねじれが見られる。5 は方形の頭部、6・7 は頭部が折れる形態である。8 は細長い銅製品で刀子のように片側縁が刃部状を呈するものである。9 は薄板状、10 は目釘穴を有する青銅製品で、いずれも全形は不明である。銭貨は北宋を中心に唐～明代のものがある。このうち、4 面段階の窪地状地形面基盤整地土中からは永楽通宝 (初鑄 1408 年) が出土した。4 面の上限年代を考える上で基準資料となる。

イ 鍛冶関係資料 (12～14)

坩堝 1 点、鞆羽口 6 点が出土し、そのうち銅鍛冶に関わる坩堝と鞆羽口 2 点を図化提示した。12 は椀形の坩堝である。肉厚な器面の外面にはナデ・ユビオサエ痕が残る。口唇部から内面にかけて赤銅色の銅滓が付着する。14 は漏斗形を呈する鞆羽口である。器面はナデ調整を行い、先端部にはくすんだ赤銅色の銅滓が厚く付着している。13 は先端部のみ残存するが、大きさや調整の特徴からみて 14 と同形のものであろう。なお、12・13 は窪地状地形面の基盤整地土から接近して出土している。しかし、銅滓や鍛冶遺構は見当たらず、他所から整地土とともにもたらされたものと考えられる。

ウ ガラス製品 (11)

石列 1 の掘り方内から 1 面段階に帰属するおはじき様のガラス製品が出土した。直径 1.4cm・厚さ 0.46cm、成分分析は行っていないが非常に良質なガラスで、気泡や不純物はほとんど見られない。透明度が高く鮮やかな青色を呈する。完成品か否かはわからないが、両面に工具によるものとみられる線状の圧痕があり、そのあり方からおそらく溶解しているガラス塊を鉋等の工具で潰して円板状にしたものであろう。

(5) 自然遺物 (第 26 図)

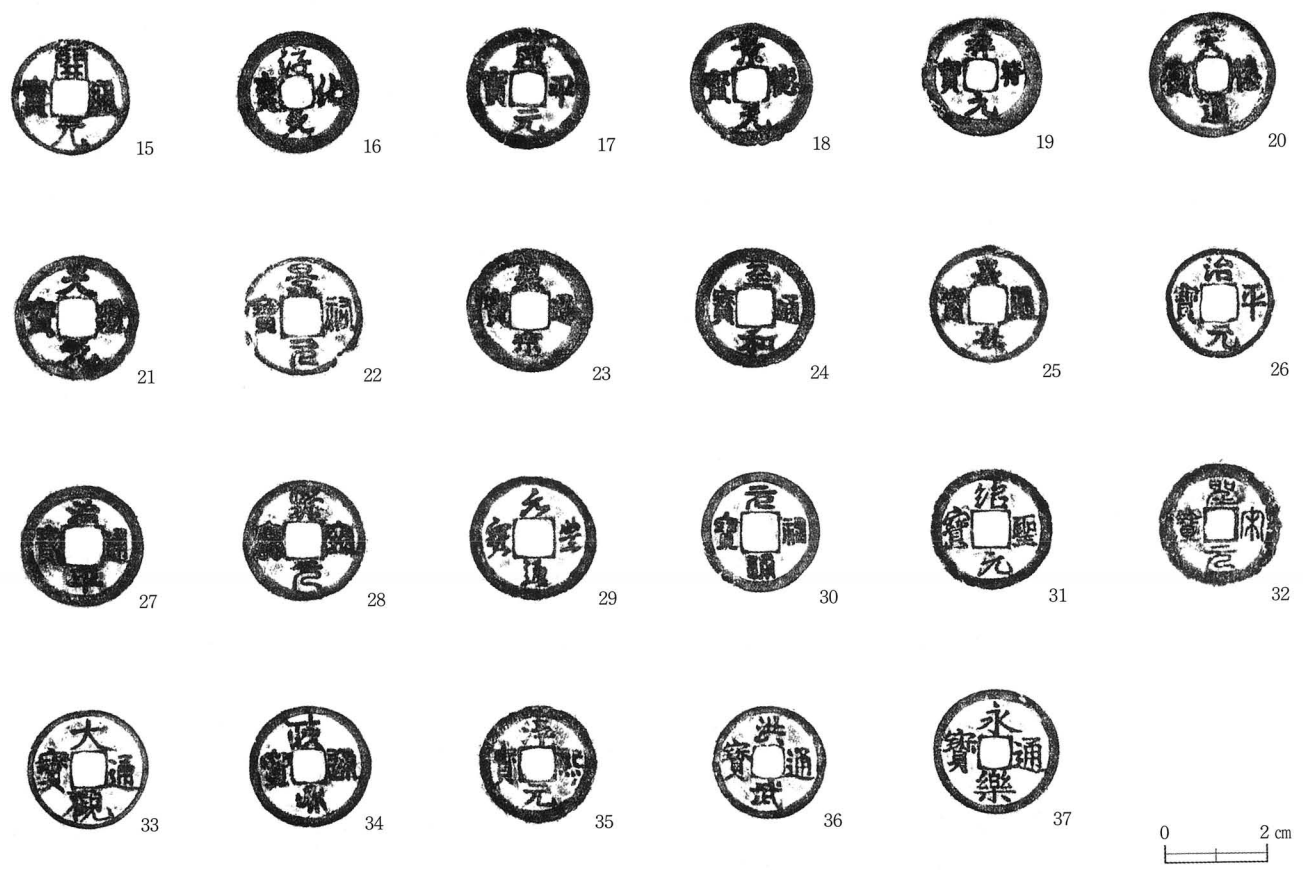
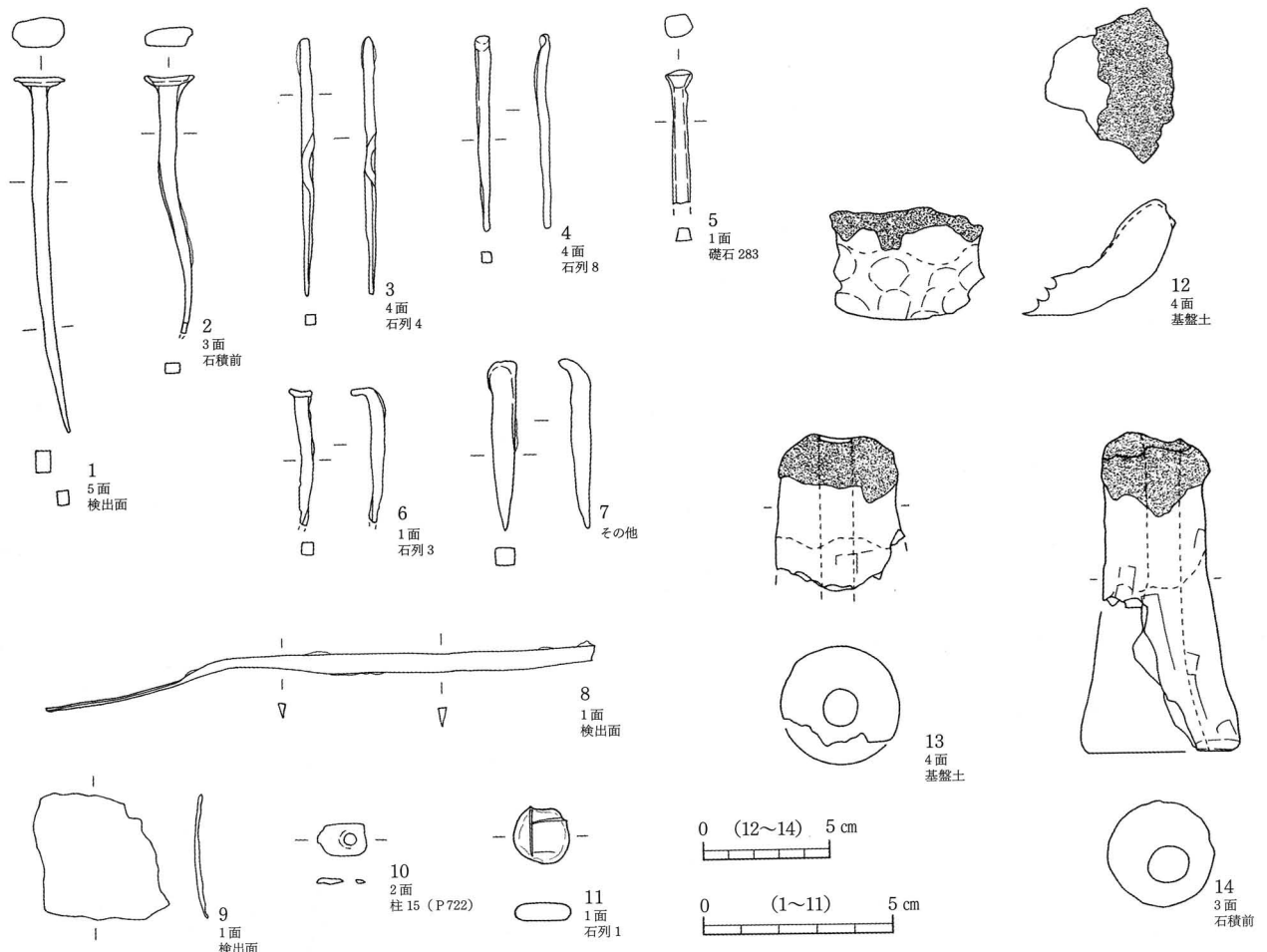
窪地状地形面の基盤整地土や石積前空間の堆積土から自然遺物が多数出土した。その大半は古環境復元を目的に採取した土壌試料からのもので、花粉、種子、珪藻、植物珪酸体等の植物遺体が中心である。これらの分析は外部機関に委託し膨大なデータが提出されているが、今後の調査による蓄積も含めて本報告で一括して掲載することとし、ここでは遺物として取り上げた大型の動植物遺体についてのみ報告する。

動物遺体には貝、骨類がある。貝類は 3 点が出土し、うち 2 点を写真で示した。いずれも殻の特徴から日本近海に生息するアカニシ貝と同定されるが保存状態が悪く、1 がかろうじて螺塔上部の外殻を残す。拳状に発達した肩部に列状の瘤が見られる。骨類は 3 点が得られたが、種の判明するものはない。3 は中型種と思われる骨片である。末端に直径 3 mm の孔が 2 孔穿たれるが貫通はしない。道具として加工されたものかもしれない。図示していない脛骨と思しき 1 点にも加工痕 (切痕・打割痕) が見られた。

大型の植物遺体は、窪地状地形面基盤整地土や石積前空間下層堆積土から出土したクルミ、モモの核がある。また、後者の地層からはイネの穎が多出し、ヤナギ属やクリ等の自然木も相当数出土した。一方、窪地状地形面の基盤整地土に多量に含まれる炭化材にはクマシデ属、ブナ属、コナラ属、サクラ属、カエデ属等が見られた。これらを含め、外部委託した微細遺物採取では 47 分類群に及ぶ木本植物、草本植物遺体 (種実・葉・枝条・胚乳) が得られている。



第26図 自然遺物



第27図 金属製品・ガラス製品・鍛冶関係資料

第IV章 調査のまとめ

1 遺物の様相について (第23・28・29図)

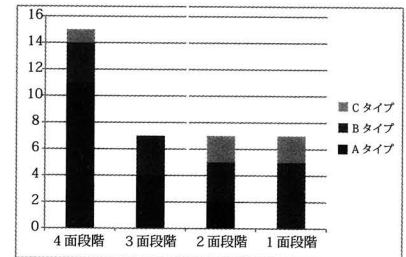
(1) 土師質土器皿について

ア 3つのタイプとその変遷

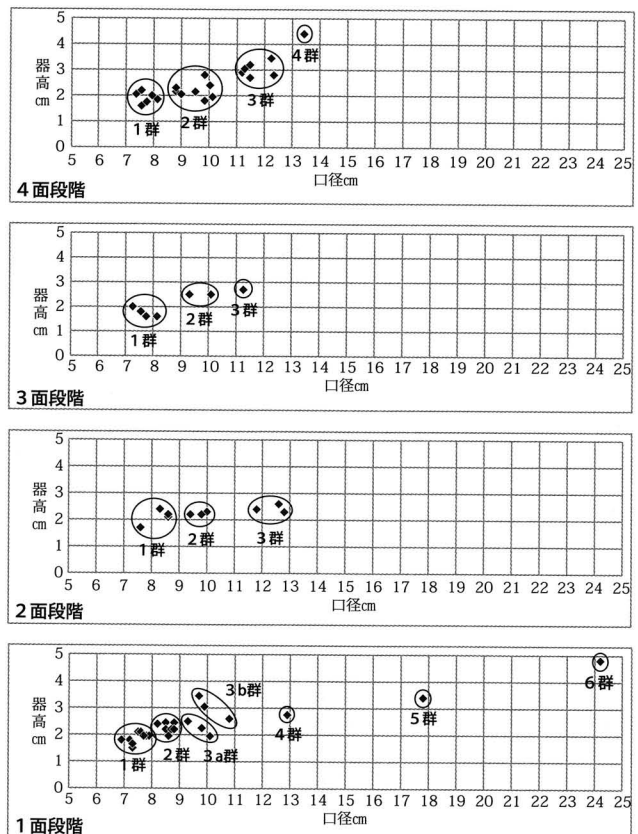
第23図に示したように皿の内面見込みに対して行われる特徴的な整形形法がある。その基本となるのは体部立ち上がり際にナデを行うことである。ナデは個体ごとに強弱の差はあるが、その結果見込み部分が島状に盛り上がった状態になる。その部分に1方向からナデを施すことにより中央部が平坦になるものをAタイプとする(2・12・13・18・19・23・24・30・32・35等)。次にナデを施さず島状に盛り上がったままとなるものをBタイプ(1・7・20・33・34・37・47・48・52・64等)、島状に盛り上がった見込み中央部をおさえ等によって窪ませたものをCタイプ(14・39・42・50・53)とする。本書に図示したもの以外で見込みの状況が分かるものを加え、各面ごとに個数を示したのが第28図である。4面段階ですでにこの3タイプは確認できるが、Aタイプが圧倒的な数量を占める。Bタイプは4面～2面段階まで一定量みられ、1面段階で増加する。Cタイプは全体的に少量である。注目されるのはAタイプで3面段階～2面段階へと数が減じて1面段階ではその姿を消す。Aタイプが存続する2面段階は15世紀後葉から16世紀前葉の中で捉えられるが、出土数からみてやはり4面段階が中心となり、Aタイプは殿村遺跡において15世紀代の指標となる皿と捉えることも可能ではないかと思われる。Bタイプは2面段階以降立ち上がり際のナデが強くなる傾向がみられ、より16世紀的な様相となっていくものと推定される。CタイプもBタイプ同様に2面段階以降にピークを迎えるものと思われるが個数が少ないため、他のタイプも含め今後の資料の増加を待ちたい。

イ 法量について

各面で出土した皿のうち口径が推定できるものを抽出し、法量分布図を作成した(第29図)。その結果4面段階の分布を見てみると、口径7.3～8.1cm(1群)・8.8～10.1cm(2群)・11.1～12.3cm(3群)・13.4cm(4群)に分けることができ、器高もそれに比例して右肩上がりとなる様子が見つかめ、明らかに法量の分化がおきていることが分かる。これは各規格に対する需要があったことが窺え、皿の使い分けがなされていた可能性を示す。3面段階と2面段階は資料数が少ないが1群から3群は4面段階とほぼ同じ範囲に入っており、同様な法量分化の状況が見て取れる。細部を見ると2面段階の3群はやや口径が大きくなっているがそれに反し器高が3cmを超えない点が認められ、口径に大小はあるが器高がほぼ同じ傾向がある。大きな変化がみられるのは1面段階である。ほとんどの皿が口径11cmを切り、その内の多くが9cmを切る。その結果、口径6.9～7.8cm(1群)・8.2～8.8cm(2群)・9から11cmの間で器高が低いもの(3a群)、高いもの(3b群)・12.9cm(4群)・17.8cm(5群)・24.2cm(6群)に分けられた。ちょうど4面～2面段階の3群の部分が無くなった形となり、皿の小型化とともに大型の皿の出現



第28図 皿3タイプの変遷



第29図 土師質土器皿法量の変化

という状況がみられる。1面段階は16世紀前葉～中葉の時期があてられ、16世紀に入って皿の規格に対する需要に変化が起きたとみられるが、その原因については文献史料なども活用しながら調査していく必要がある。

(2) 殿村遺跡の遺物相

殿村遺跡の性格付けに欠かせない遺物としてまず茶臼と風炉があげられる。これらは一般の集落遺跡にはみられず、居館跡・寺院跡から主に出土するものとされる。また鳴滝産の石を使用した硯を含めてより品質の良いものを選択するブランド志向の様子が窺える。茶臼と風炉は古瀬戸系陶器の天目茶碗および中国産の天目茶碗の存在に大きな意味をもたせる。これらの道具揃えによって15世紀にはすでに喫茶をたしなむことのできた階層が殿村の地に存在し、大規模な造成や石積構築に関わっていたことが推定されるのである。

また、卸皿・播鉢・折縁深皿のような調理具はみられるが古瀬戸系の皿類や漆器碗などの日常の食膳具が非常に少ない。目立つのは土師質土器皿と箸状木製品である。おそらく先に見た法量分化は土器皿が酒器や食膳具等に使い分けられていたことを反映しているものと推定される。土器皿（カワラケ）はハレの時に使用される器といわれ、使用后廃棄される。同様に箸も廃棄され、実際に多量の箸状木製品が出土しており、酒食を共にする宴が行われた痕跡とも受け取れる。また特に4面段階は灯明皿が占める割合が高く、夜間に行われる宴についても今後念頭に入れていく必要があるだろう。これは木製品にみられた祭祀具と推定される刀形や串状木製品（斎串）等の存在と無縁ではなく、信仰上の儀礼が行われ、使用後の箸や土器皿は祭祀具ともども廃棄された可能性がある。

このように殿村遺跡の出土遺物からはそれらを使用した人々の階層の高さが窺え、さらに信仰との関係性を持っていた一面も類推することができる。

2 造成面と遺構の変遷について（第3表・第30～32図）

前章では平場の変遷について、主に地業のあり方から述べた。ここでは平場上に展開する各種遺構や調査地周辺の状況も考察しながら、もう一度遺跡の動きを追ってみたい。

(1) 5面段階

この段階は断片的な情報であるが、岩井堂沢に臨む安定した微高地上を中心に、長期間にわたる活動の足跡が残される。その最も古い段階は縄紋時代に遡り、前期前半頃の土器片や石器類の散布が認められる。

微高地が大きく活動の舞台となるのは古代以降で、微高地から東側の低湿地に至る地形面上には竅穴住居址や溝状遺構が営まれる。時期的には奈良時代末から平安時代中期までの遺物が見られ、住1出土資料は8世紀末～9世紀初頭に位置付く。古代の遺物は住1の段階、とりわけ須恵器の出土量が多く、かつて会田小学校校庭拡張に際し発見されたという窯跡との関係の中で遺跡の性格を考えなくてはならない。

古代から中世への移行過程は判然としない。微高地上から見つかったピットの多くは大きさや形態の特徴から中世のものと考えられ、旧表土面からは12世紀代の山茶碗や、ロクロ調整土師質土器皿が得られている。後者と同じ特徴の皿は4面基盤整地土中にも見られ、15世紀代の古瀬戸系陶器等が伴出している。従って中世における活動は12世紀代には開始され、連続的に次段階へと移行していったと考えられる。

(2) 4面段階

本格的な造成が始まった段階で、南面を石積で画す平場が造成された。前章で触れたように、この石積は見せることに主眼を置いた象徴的な存在であろう。従って平場の正面は南面に求められ、この意識は1面段階まで不変であった。この平場に至る出入口がどこかはまだ明らかではないが、本段階には石積Aの前に土塁を伴う通路状遺構があった。これが石積を右手に見ながら平場に上るよう巧みに配置された出入施設であるものと考えられる。一方、あえて平場の南東部を挟り込むように設けられた窪地状地形面がいかなる性格を帯びていたのか。局所的な調査からは鮮明にし得ないが、スロープを介して平場と往来が可能な、何らかの目的をもった空間であったことは間違いない。

この段階の平場における遺構の展開は未掘範囲が多く明らかにできない。唯一確認されるのは石列4とその西に広がる炉址群である。炉址群は石列に先行し一定範囲に集中する。周囲には焼土・炭を含む整地土も広がり、炉を伴う特定の施設空間だったと考えられる。石列4は建物等の土台としての見方が正しければ、石材の大きさから推定して大型の建築物を想定しなければならない。また石列8については前章でも触れたが、古い段階の平場前面石積の可能性を残す。ならば、4面当初の平場前面は単純な直線構造ではなかったことになる。この点は今後の解明を待たねばならない。

(3) 3面段階

前段階の窪地状地形面を埋め立て、さらに石積を改修して南東部にスロープが設けられた段階である。これは平場の拡張とともに出入施設が改められたことを物語る。石積前空間は依然として確保されているが、この段階のうちには多量の木製品を含む廃棄土で埋没が進行しており、次第に出入施設としての機能を失っていったことを暗示している。廃棄木製品には生活用品や祭祀具に加え、端材や削屑等建築・木材加工に関わるものが数多くみられ、この段階における平場上での活発な活動を示唆している。しかしながら、4面と同様、平場上の遺構のあり方は大部分が未調査のため詳しく論ずることはできない。

なお石積前空間堆積土からは15世紀中～後葉を中心とする焼物が出土している。また、4面の窪地状地形面からは永楽通宝（初鑄1408年）が得られている。従って4～3面段階は15世紀代の内に求めることができる。

(4) 2面段階

平場が南に大幅に拡張され、それまで象徴的な存在であった石積が廃された。4面段階の平場造成に次ぐ大きな画期と捉えるべき段階である。拡張に供した土は岩盤（山腹や尾根裾）を掘削して得たものである。従って、今回調査の及ばない東側でも尾根を削って拡張が行われたのかもしれない。あるいは、平場から離れた他の地点でも別の造成事業が行われ、そこからもたらされたと考えることもできる。

この段階は引き続き南東隅にスロープが設けられる。また、平場上に展開する建物址や溝状遺構は、前段階に平場の前面石積で規定された方向性をそのまま継承している（以後1面まで継続）。遺構のあり方で注目されるのは柱穴列や溝状遺構で空間分割が行われることである。特に溝582・509・716、柱穴列13により、平場は大きく南北に分割されている。その南半部はさらに南北方向の溝状遺構で分割される。L字形の溝465も一定範囲を区画する溝である。こうして画された特定の空間に特定の遺構が集中する。最も顕著なものは礎石建物址と炉址群である。礎石建物址はその存在自体が重要であるが、分布域も平場東部、とりわけ南東部に偏在している。ここはスロープを上りきった位置である。その西側、石列6を隔てた西側には炉址群がある。遺構が示すこうした特徴は、広大な平場が特定の機能をもった空間の集合体であったことを示している。そして、こうしたあり方は次の1面段階まで引き継がれていく。

(5) 1面段階

この段階に2面を上回る大規模な造成が進められた。特に平場背後（北側）への大幅な拡張が実施され、それに伴って遺構の分布域も大きく拡大した。

1面も引き続き南東部のスロープが保たれその北側空間に遺構が希薄であることから、ここに出入空間が求められる。2面で見られた平場の南北分割はより鮮明となり、その結果として新たに築地堀（石列1）が出現する。大きく広がった北側の空間は溝188でさらに分割される。溝182・183・900も一定範囲の分割に供されたものと受け取れる。石列1以南では石列2・3による東西方向の分割が行われる。両石列に挟まれた空間は平場の中央、石列1の真正面にあたり、遺構分布が希薄である。ここに強い正面性を窺うことができる。一方、調査区東壁下の盛土状造成土は土塁等の区画施設の可能性があるが、とすればここに平場の東縁を求めることができるかもしれない。

掘立柱建物址や柱穴列は石列1から溝188の間への集中が顕著で、この一帯が主要な建物空間だったと

考えられる。しかし、礎石建物址は分布傾向が異なり、この空間には少ない。むしろ前段階と同様、石列1以南の東半部、次いで北東部への偏在が認められる。

この段階は平場南面、すなわち土壘南空間の埋め立てが進行する。2面段階以降、平場南面の区画は3・4面段階の通路南面土壘を利用し、その南面を土坡としていたが、その後徐々に埋め立てが進み、次第に緩斜面化していった。この埋立土や1・2面の出土陶磁器には僅かながらも大窯製品が伴っている。3・4面段階には見られないことから、1・2面の時期は古瀬戸編年に照らして15世紀後葉以降と捉えられる。伴出する内耳鍋もB類が主体であり、その年代観とも符合する。しかし、下限の時期については甚だ不鮮明である。今回の調査では16世紀後半以降に下る遺物は見当たらず、現状では1面を16世紀中葉までとみておく。

ところで、平場と外界を結ぶ道筋はどうなっていたのか。いま一度遺跡の立地を振り返ってみると、平場は会田川やその右岸に沿って通過し、後の善光寺街道会田宿（仲町）となる古道に臨む高台にある。文禄3年の絵図（第5図）を見ると古道は小泉方面に通じる要路として重視され、道沿いには会田氏の家臣屋敷が連なっていたとされる。当時はこの古道から平場に至る道があったはずである。そこで参考となるのが明治24年の地籍図である（第10図）ここに記される地割の多くは近世以前に遡るものであろう。さらに今回検出された平場との整合性が高いことから、中世の地割が反映されている部分が多々あるものと推察される。その上で特に注意を引くのは図中B・Cと記した2本の直線道路である。これらの道は現在も断片的に残り、それぞれ平場の東西隅に通じている。そこには強い計画性を窺うことができ、従ってこの2本の道が平場に至るルートであった可能性が高い。調査所見から想定した南東部の出入空間は、こうした地割のあり方からも認めることができよう。

では、西側Bの道が行き着く先はどうなっていたか。調査区外、グラウンドの南西隅には人工的とも思える不自然な半島状の張り出しがあり、地籍図でもはっきりと確認できる。これまで見てきた平場がここでのように処理されていたのか気になるところであるが、いずれにしても道はここに直結しており、ある段階において出入口空間となっていた可能性を窺わせる。この道B沿いには補陀寺があった。また、東西道路A・Bに挟まれた幅75mの空間は整然とした方形の地割をなしている。従って現在会田小学校が建つこの一帯にも、今回検出した平場と関連する遺構面が広がっていた可能性を考えなくてはならない。

(6) 1面以後

最大時には東西幅75m以上の広大な範囲まで発展した平場における活動も1面の廃絶をもって終焉する。1面は廃絶にあたって相当整理が行われているとみられ、生活遺物がほとんど残されていない。その上、この時期に形成された土壘南空間の埋土上層には多量の焼土・炭が廃棄され、被熱で割れた茶臼や礫、陶磁器片が多数含まれていた。礎石等の遺構構成石材にも被熱痕が観察され、遺構面にも被熱面や炭灰の散在が見られた。その上を広く黄褐色土が覆っている。こうした状況から1面の終焉はきわめて突発的で、火災を伴うものであった可能性を考え得る。その後の片付や整地のあり方を見ても、この廃絶には大きな意図が感じられる。

1面以後の土地利用はどうだったのか。明治2年会田町村絵図（第7図）をはじめ、江戸時代後期から明治時代に描かれたいくつかの絵図による限り、遺跡一帯は専ら畑地として利用され、居住域からは外れていたようである。また、いつ頃からか、遺跡周辺が「殿村」と呼ばれるようになった。この名称は既に文禄3年絵図に見られるが、実際に記入された年代はわからない。明治2年会田町村絵図には「会田小次郎殿古城跡」と記され、調査地を含む高台上に会田氏が居を構えたとの伝承がある。こうした経過を見る限り、調査地周辺におけるその後の居住活動や開発行為が禁忌されていたのではないかとすら思わせる。

維新时期を迎え、江戸時代には寺子屋ともなっていた補陀寺は廃仏によりやがて学校となり、現在の会田小学校の基礎となった。今回の調査地は近代以後も畑地として利用され、戦前に伝染病隔離病棟が置かれた後、昭和28年に会田中学校校庭として大規模な拡張と埋め立てが行われた。完成した校庭の南辺は奇しくもかつて存した平場の南面と位置を重ねることとなった。

第3表 中世造成面の変遷過程一覽

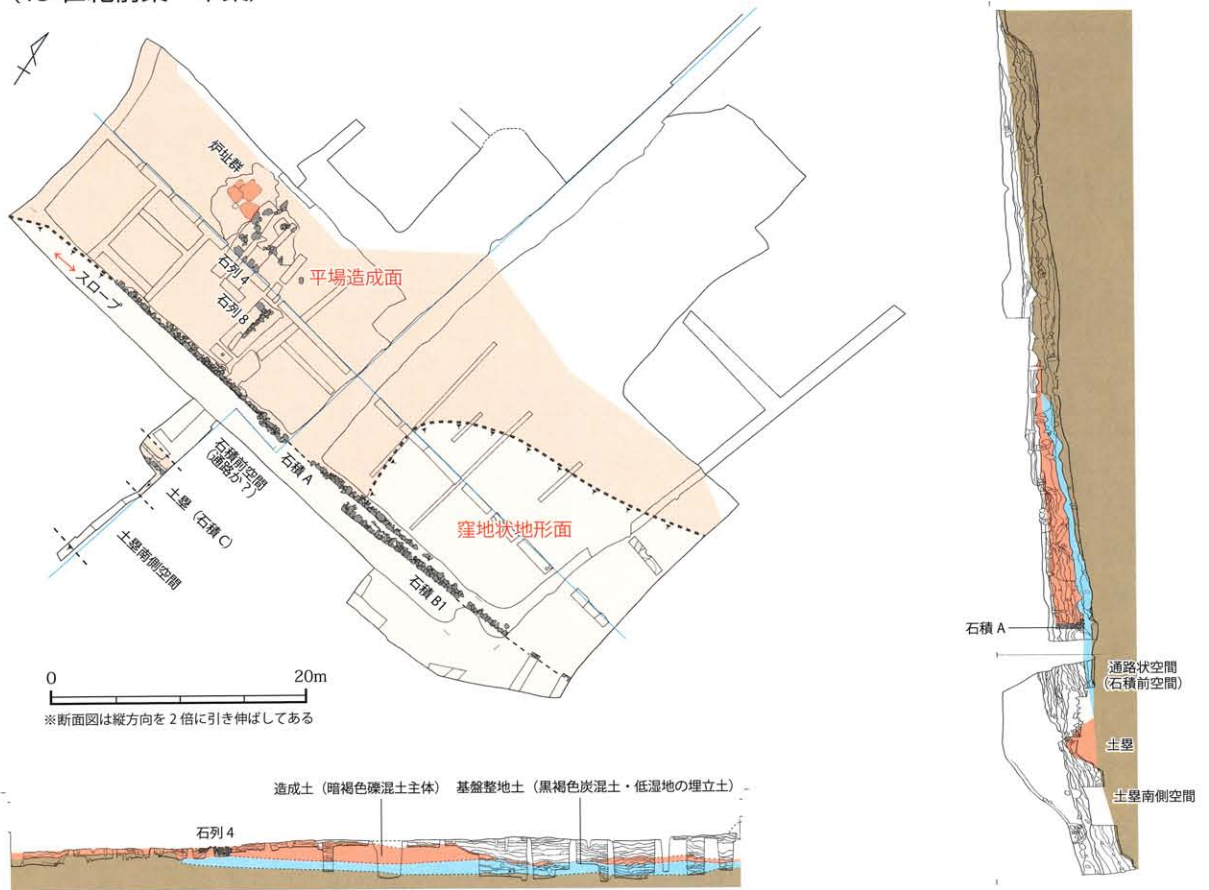
造成面	主な造成の内容	推定時期	時期指標となる遺物
5面	古代：微高地から低湿地にかけての緩斜面に住1（8c末～9c初）、溝1233他が営まれる 中世：本格的な造成の前段階 西部の微高地を中心に遺構分布	古代～15c前葉	土師・須恵・灰釉（奈良末・平安） 山茶碗第4型式（旧表土）
4面	微高地から低湿地西半部を埋め立て平場を造成 低湿地は基盤整地土を貼り、低い地形面を形成（窪地状地形面） 平場の南面は石積Aで画す。窪地状地形面も石積B1で画す 石積前は通路状の空間（石積前空間）を設け石積西端で上昇させる 石積前空間南辺は土塁（石積C）で画す。土塁南側は平場を経て南に落ち込む 石列8は石積Aに先行するか？ 石積Aは数回の修築がなされる	15c前葉～中葉	永楽通宝（窪地状地形面基盤土） 古瀬戸後期Ⅰ～Ⅲ（整地土・基盤土）
3面	窪地状地形面を岩屑多含黄褐色土で埋め立て、平場を東に拡張。その際石積B1を増し積みし、さらに南折する石積B2を設け（その際石積AとB1の東部を埋め）南に拡張 南拡張面はスロープを呈し、石積B3構築によりさらに拡張	15c中葉～後葉	古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ（石積前空間下層堆積土）
2面	東端部を除くほぼ全面に整地土を貼り、新たな造成面を築造。石積A・B、石積前空間を埋め立て、平場を南に拡張、土塁をその南端とする 中央部以東の埋め立てには岩屑多含黄褐色土を多用する	15c後葉～16c前葉	古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ・大窯（遺構・検出面・整地土） 内耳鍋B類
1面	2面のほぼ全面に新たな造成土を盛り1面を形成する 北部は傾斜面を切土し、平場を大幅に拡張する。南面は土塁南空間を段階的に埋め立てる 石列1（築地塀か）等で内部空間の高低差を調整する 2面から1面への移行は段階的で、東部～南部に1面が存在する。またこの過程で石列2と石列3の間には1段高い面を構築する	16c前葉～中葉	古瀬戸後期Ⅱ～大窯Ⅰ（遺構・検出面・整地土） 内耳鍋B類
1面以後	1面の廃絶後ほぼ全面に黄褐色土を貼り整地する その際1面の建物等は除却された可能性がある その後の造成を伴う土地利用は近代まで見られない	16c中葉以後	不明

5面段階（古代～15世紀初頭）

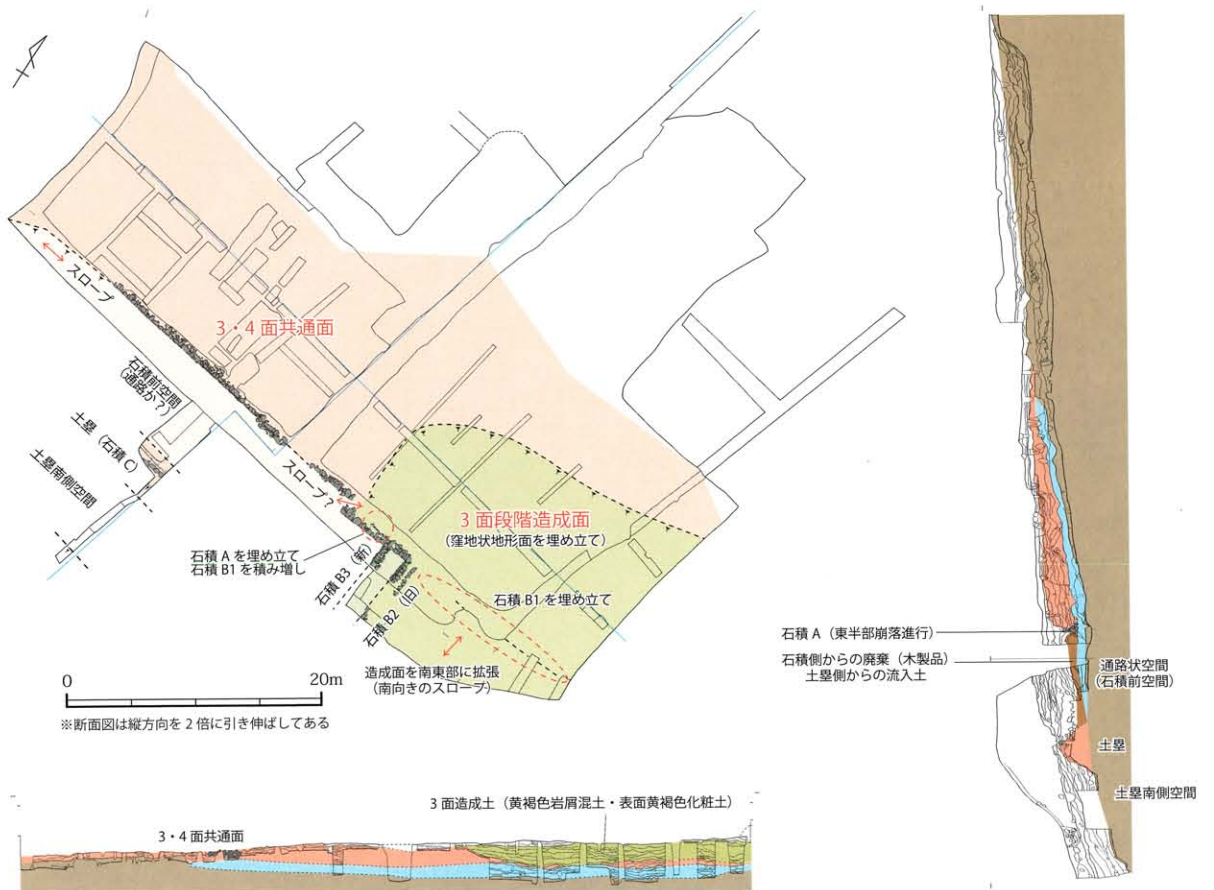


第30図 中世造成面の変遷（1）

4 面段階 (15 世紀前葉～中葉)

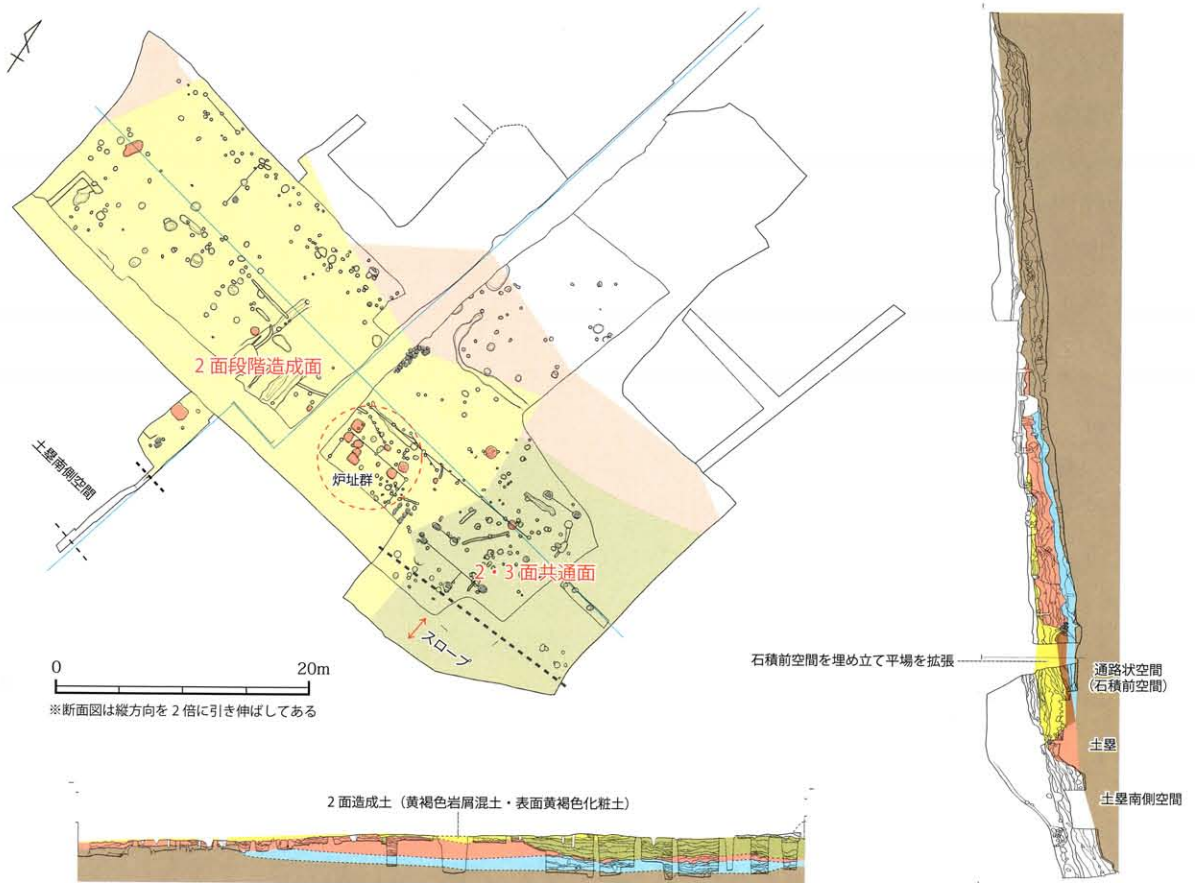


3 面段階 (15 世紀中葉～後葉)



第31図 中世造成面の変遷 (2)

2面段階 (15世紀後葉～16世紀前葉)



1面段階 (16世紀前葉～中葉)



第32図 中世造成面の変遷 (3)

3 現段階における遺跡の評価と今後の調査課題

最後にまとめとしては簡略に過ぎるが、現時点における遺跡の可能性を予察し今後の課題を見据えたい。

これまで見てきたように、殿村遺跡は15世紀代を中心とする石積や築地塀、礎石建物等を伴った大規模な造成遺構の存在や、茶臼や風炉も含めた茶道具の保有、焼物や石製品にみえるブランド志向等、際立った特徴を有していた。こうした様相から遺跡は一般的な集落跡とはいえ、城館跡あるいは社寺等、大きな勢力の主導によってなされた大規模な事業の跡であることは明らかであろう。問題はその勢力や遺跡の築造目的が何かにある。

そこで第II章でも触れたが、遺跡を取り巻く中世の歴史的環境として特筆すべき二つの事象を振り返ってみる。一つ目はこの地に会田御厨が置かれ、東信濃から入った滋野氏系の会田氏（海野氏・岩下氏）がその経営に深く関わっていたことが挙げられる。会田氏は殿村の地に居を構えたとされ、周辺には虚空蔵山城跡や会田塚、廣田寺、御厨神明宮等、会田氏や会田御厨と関係の深い遺跡や社寺が分布している。二つ目は虚空蔵山が古くから信仰の対象であり、古代から中世にかけて岩井堂沢をはじめとする山麓一帯に霊場が形成されていた可能性が高いことである。狭い谷にもかかわらず、岩井堂沢には中世やそれ以前に遡る社寺や石造物が密集している。その一つである長安寺や補陀寺跡は今回の調査地に近接し、また検出された平場と同時に存在していた。

こうした歴史的背景を考慮に入れたうえで一連の調査成果を評価するなら、今回検出された平場遺構は、城館遺跡よりも社寺遺跡の側面が強いのではないかと考えられる。その理由は次のとおりである。まず、今回の調査では城郭の要件を満たせる十分な防御施設が見出せていない。次に平場遺構の規模（平面積だけでなく地業の規模）が、松本平でもこれまでいくつか調査事例のある土豪クラスの居館跡（半町＝約50m四方程度）と比べて破格であること。仮にここを会田氏の居館とした場合、果たして在地領主の会田氏がこれだけの事業をなし得たのか。また、一般に中世における石積・石垣や礎石建物の導入は寺院において先行し、特に15世紀代の石積のほとんどは寺院跡の事例である。ちなみに、殿村遺跡の石積は、当時の強大な寺院勢力である白山平泉寺や根来寺等中世寺院の坊跡に見られる石積と非常によく似ている。反面、虚空蔵山城跡をはじめ、松本平の「小笠原氏系」山城跡に見られる平石（割石）積みの石垣とは手法がやや異なり、時期的・技術的な隔たりを窺わせる（写真図版12）。そのほか、今回検出された平場には、当時の守護大名や有力領主層がこぞって志向した室町将軍邸（花の御所）をモデルとした居館の構え、例えば会所や庭園、御殿等で構成される空間を想定することも現状では難しい。遺物においても京都系のカワラケや、宴の存在を示す多量廃棄遺構がなく、高級な茶臼や風炉等寺院や居館跡に出土が偏る茶道具を保有する一方で、居館を最も特徴付ける威信財である貿易陶磁が乏しく、とりわけ室礼用の壺や盤等の大型陶磁器がほとんど見られないことが挙げられる。

これは今回見つかった平場遺構に関して現時点における見方であり、中世に会田盆地の中心的位置にあったであろう広大な遺跡の中には、居館や寺院など複数の施設が存在していた可能性が高い。いずれにしても、今回の調査結果から遺跡の性格をこれ以上浮き彫りにするには限界がある。それは遺跡の考古学的な情報に加え、虚空蔵山麓一帯における中世の様相が明かされていないことによる。この遺跡に関わった宗教勢力や政治勢力は何か、会田氏や会田御厨の実態や経営基盤は何か等、発掘調査と同時に広い視点から地域の歴史を紐解いていかなくてはならない。それこそが与えられた今後の課題であり進むべき方向である。

今回の調査は、予想に反して出現した未曾有の中世大規模造成遺構と押し迫る工期の狭間で、開始早々から困難と失敗の連続となってしまった。結果的に遺跡は保存に至ったが、高まる期待とは裏腹に解明できたことはごく僅かで、それ以上に課題ばかりが山積してしまった。この点は深く反省しなければならない。

最後になってしまったが、2年余の長きにわたる調査の間、終始惜しめない協力や助言を頂いた四賀地区町会連合会をはじめとする地元住民の方々、会田小学校をはじめ四賀地区内小中学校およびPTAの方々、県内外の考古学研究者や研究団体の方々、そして何よりも夏冬の過酷な環境の中、長期間調査にあられた発掘参加者の方々に感謝と労いの意を表して本書の締めくくりとしたい。



写真図版



殿村遺跡（●印）と会田盆地北部の地形



同上（北東から）



殿村遺跡周辺と虚空蔵山麓の景観（南から）



殿村遺跡から西方を望む（手前：会田宿、後方：五常地区）



調査地の位置と周辺の地形 (S = 1 : 2,500)



調査区全景 (2面・西から)



同上 (2面・上から)



石積A・B検出状況（南東から）



石積B2・B3検出状況（西から）



石積A西半部検出状況（南から）



石積B1・B2西部検出状況（南から・奥は石積A東端部）



石列8検出状況（西から）



石積C（土壘）検出状況（西から）



石列4検出状況（南から）



2面東部の遺構群（東から）



2面炉址群・1'面石列2（南西から）



溝 465 (2面・北東から)



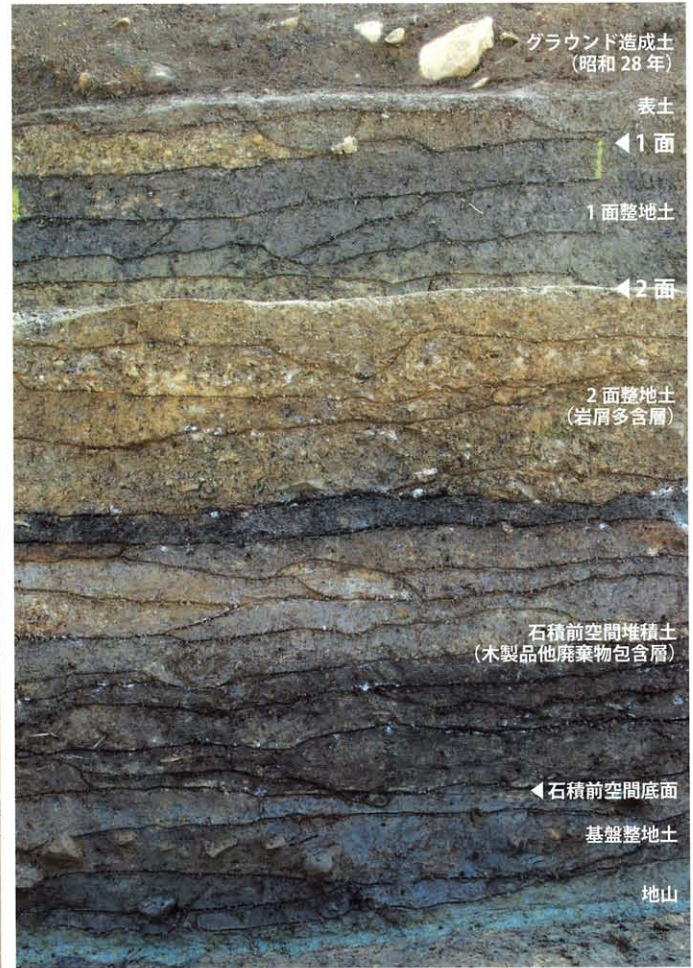
1面遺構完堀状況 (北西から)



石列 1 西半部 (1面・南から)



土 873 (1面・南から)



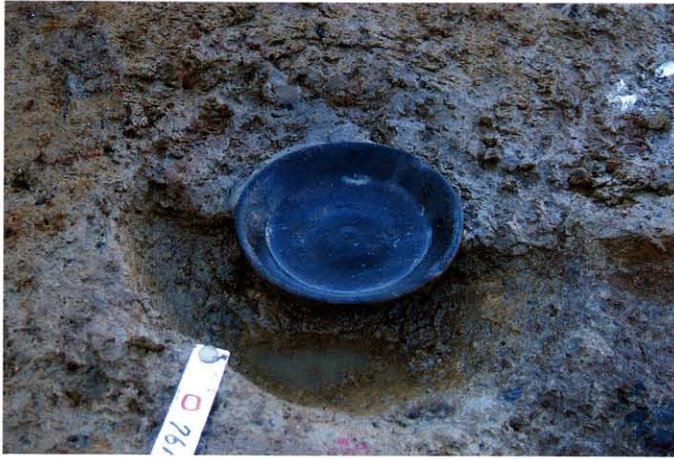
石積前空間 (トレンチ A 中部) の土層堆積状況



石積 B3 裏込土の状況 (A トレンチ 東部・北から)



石積 A 背後の造成土 (トレンチ B 東壁)



土師質土器皿（灯明皿）の出土状況（1面P751）



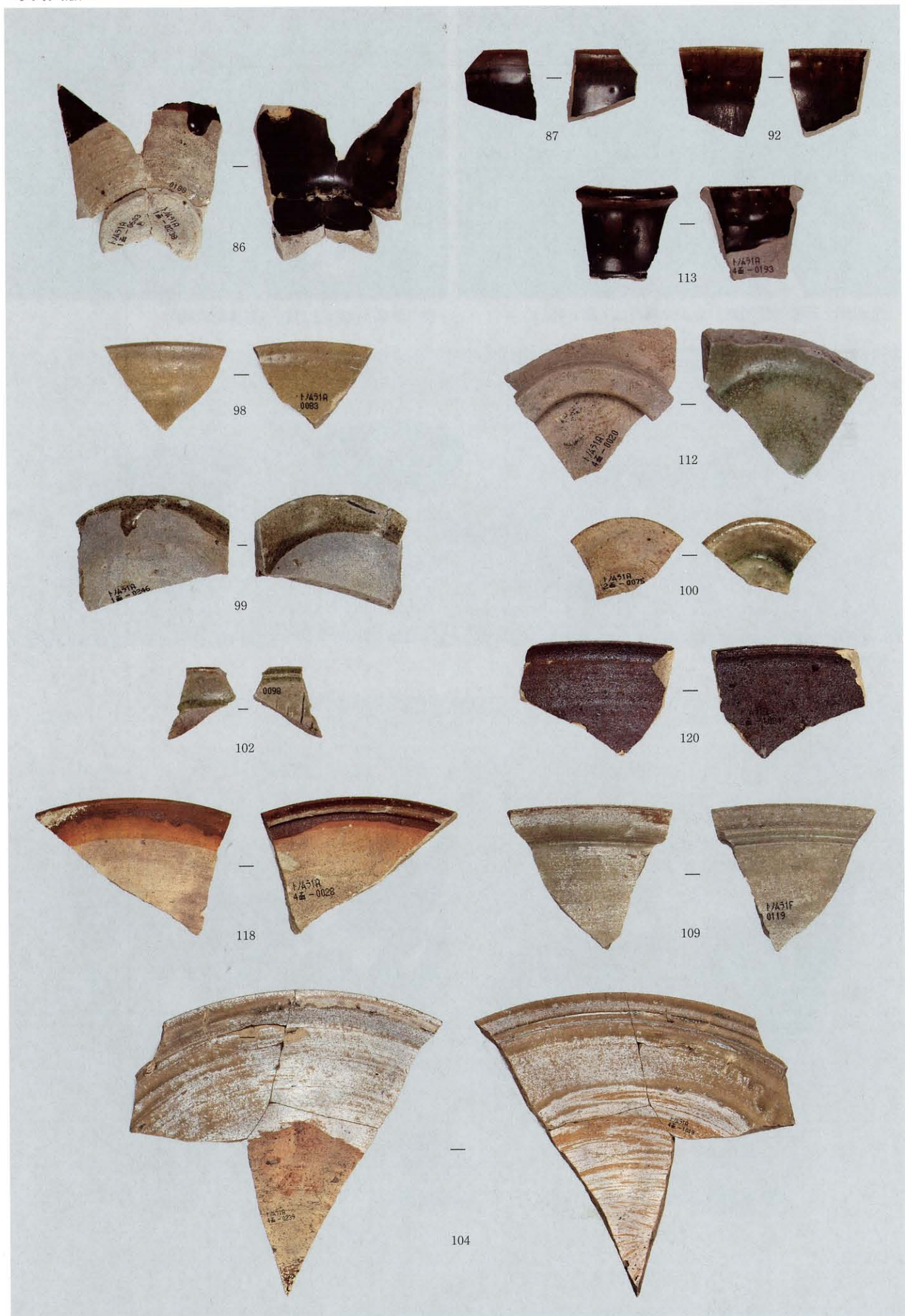
硯と木製品の出土状況（石積前空間）



土師質土器（皿）



土師質土器（内耳鍋）



古瀬戸系陶器 (S = 1:2、104 のみ 1:3)



中国産陶磁器・瓦質土器・珠洲・常滑 (S = 1 : 2)



木製品 (S = 1 : 3)



石製品 (S = 1:3)



金属製品・鍛冶関係資料・ガラス製品 (S = 2:3)



中の陣第2郭の石垣



水の手周辺の石垣 (1)



水の手周辺の石垣 (2)



水の手周辺の石垣 (3)



長居原の石積 (1)



長居原の石積 (2)



長居原の石積 (3)



長安寺の田の神 (重要有形民俗文化財・松本市立博物館蔵)

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしとのむらいせきだい1じはくつちょうさがいほう
書名	長野県松本市殿村遺跡第1次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.208
編著者名	竹原 学、原田健司、宮島義和
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 松本市中山3738番地1 TEL0263-86-4710)
発行年月日	2011 (平成23) 年3月25日 (平成22年度)

ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村						
とのむらいせき 殿村遺跡	ながのけん 長野県 まつもと市 松本市 あいだ 会田 536外	20202	1023	36度 21分 12秒	137度 59分 34秒	20090907 ～ 20100129	2,027㎡	四賀地区統合小 学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
殿村遺跡	散布地 集落跡 社寺跡 城館跡	縄文 古代 中世 (一部 古代)	なし 竪穴住居址 石積 石列 集石 溝状遺構 焼土面 (炉址) 礎石 (単独) 礎石建物址 掘立柱建物址 柱穴列 土坑・ピット 土塁	1基 6基 12基 4基 56基 33基 32基 5基 8基 17基 854基 1基	土器・石器 土師器・須恵器・灰釉陶器 焼物：土師質土器 (皿・鉢・播 鉢・内耳鍋)、須恵質土器 (播 鉢)、瓦質土器 (播鉢・風炉)、 珠洲・常滑 (甕)、山茶碗、古瀬 戸・大窯 (天目茶碗・平碗・丸 碗・豆皿・縁釉小皿・折縁深皿・ 直縁大皿・卸皿・合子・碗形鉢・ 播鉢形小鉢・播鉢・瓶子他)、中 国産陶器 (天目茶碗・壺)、中国 産青磁・白磁 (碗・四耳壺) 石製品：硯・砥石・茶臼・石臼・石鉢 木製品：漆器・下駄・曲物・狭 七・箸状木製品・串状木製品・短 冊状板・刀形・部材・端材・削屑 金属製品：刀子・釘・銅銭・不明 銅製品 鍛冶関係資料：埴塙・羽口 ガラス製品：円板状 自然遺物：貝・骨・種実等			

要約

調査区を含む対象地 (松本市会田運動場) の大部分が室町～戦国時代 (15c初頭～16c中葉) の大規模な造成跡であることが判明した。造成は少なくとも4回にわたり、段階的に拡張された平場は最終的には80m四方に及ぶ。造成の前半 (15c代) は盛土の前面を自然石積みの石積で画していた。造成面上からは礎石建物、掘立柱建物、柱穴列、炉址等が多く検出され、また内部空間を画する石列や溝状遺構も多数見られた。

遺物は松本市内の中世遺跡としては数が多く、在地産の土師質土器皿・内耳鍋のほか、天目茶碗や折縁深皿等の古瀬戸系陶器、中国産の青磁・白磁・天目茶碗が多く出土した。また、瓦質土器風炉や他地域産の高級石材製茶臼等、寺院や城館遺跡にしか見られない喫茶関係の遺物が出土した。そのほか、松本地方では類例の少ない中世の木製品がまとまって出土した点も大きな調査成果である。

現状における遺跡の性格は十分明らかにはできないが、これらの遺構・遺物のあり方から寺院等の宗教関係遺跡である可能性が最も高く、一方で中世の会田氏居館跡の伝承もあり、城館遺跡である可能性も残される。

